

目 次

聖訓摘要	日生上人
釋尊中心の本尊觀について	中村清一
法華經講話(第二十四講)	小林一郎
梶木顯正師遷化	
亡き師範を憶ふ	村田顯明

○寄附維持金函費誌料領收

第十四年十二月號



統

法華團  
統一團發行

### 財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シテ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ウテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

### 本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ住所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 奉 祝

### 親王殿下御誕生

明治節の聖月而かも二十八日

第二親王殿下御誕生あらせらる

寔に天下歡喜措く能はざる所なり

謹みて大内山の彌榮あらんことを祈り奉る

るといふやうなことをする。他の方で悪い事をして置いて佛様を頼むといふのでお賽銭を上げる、この賽銭を上げるといふ精神は大抵の者がさういふやうな事になつて居る、賄賂みたやうな意味に考へて、自分が悪い事をして居るからあつち、こつち、頼んで置かうといふので、方々に行つてお賽銭を上げる。この間新聞で満鐵事件の調書を読んで居つた所が、井上とかいふ人が裁判所に喚ばれて調べられて居る時に、墨西哥の一弗の銀貨を出して卓子の上に置いたといふ、それから何の爲めにそんな物を出したと答められたので、「イヤ、實は電車賃が無いらから換へて貰ふ積りでありました」といふやうなことを言つて居つたさうであるが、或はちよつと書記が何か鼻樂の積りで出したのかも知れない。恰度そんな様な譯で、お賽銭といふ物は鼻樂みたやうに思つて居る、この點は洵に悪い事であると思ふ。それから東京あたりでも盛んにお閻魔様といふものを祀るが、あんなものを擔ぎ出して來るといふのが抑々悪い事である、これはマア佛教でいへば惡事に對する探偵長みたやうなものであるから、恰度刑事の歡迎會を開いて「どうか宜しく頼みます」と言つて御馳走でもして、「何れあなたの方に廻つて行くかも知れませんが、せんけれども、その時分には顔を能く覺えて居つて下さい」といふやうな考へでやつて居る。さういふ風に悪い事をするといふのを前提として、さうして一方でお賽銭を上げるとか、信心でもすれば一方の悪い事が帳消しになるやうな意味に宗教といふものをやつて居る。さうでなくても人間といふものは裏表が出来易いものである、それを宗教といふものが助成するやうな傾きを取るといふことは甚だ間違つ

て居る。宗教といふものは成るべく人間に二重生活の無いやうに、その代り又無間矢面に宗教といふものはやかましい小言はいはぬ、出來ぬ事は出來ぬとして之れを認容して居るのである、それは人間にはいろいろ煩惱もあり、拗けた了簡もある、洵に可哀さうなものだといふことをちやんと見て居るけれども、嘘をつかない、裏表のない生活、二重でない生活といふものを宗教は要求するのである。人がいろいろの仕事をする場合に、之れを人が監督するといふことであつたならば、監督の視て居る間は一生懸命勉強して居るが、監督が行つてしまつたならば横着をするといふ風になるけれども、神や佛を信じて神、佛を監督者とするならば、裏も表もスツカリ見通されて居る譯である、日が暮れて眞ッ暗な所でも佛は見て居る、人は視て居らぬけれども佛はちやんと見て居る、そこでその裏表の起り易い人間の裏と表を徹底的に通し見るといふ所に、宗教といふものゝ價值があるのである。だから宗教を信する事に依つて、人間は二重の生活を段々無くして行くことが出来る譯である。

そこで「仕官を法華經と思召せ」で、主人に盡すことを横着をして、「今日は病氣でもないけれども、病氣だと言つて缺勤をする、その代りに家庭で自我偈の一卷も読んで置きます」といふ、それでは法華經の精神に反するのである。それは主人に勤めるよりはお自我偈の一卷の方が餘程尊い事で、主人に勤めることが十兩の價值ならば、お自我偈一卷は百兩以上の價值がある、けれどもそれだからといつて一方で横着をして、此方で補つて行くといふやうにやつて行くことは法華經の精神ではない。所がさう

いふ考へが今日は澤山ある、だから悪い人間に行く程宗教といふものが餘計に繁昌して居るやうになつて居る、人の門に立つて物を貰つて歩いて居るやうな者は、宗教ではないかも知らんけれども、物貰ひのやうな者がチリン／＼とやつたり、ホーツと言つたりしてやつて来る、ア、いふ人間は何處に行くかといふと、邸町のやうな良い所に行つたら一つも貰ひがない、貧民窟のやうな、人殺をしたり、不都合の事でもしたやうな人間の集つて居りさうな裏店を廻つて歩くと、「昨夕は彼奴の頭を毆つて錢を三圓ばかり奪つて来たけれども、マアその代りに施でもしてやらう」といふので、五錢銅貨一つ位投げて呉れる、その方が貰ひが一番多い。さういふやうに一方で悪い生活をして、一方で謝罪をして行くといふやうな意味ではいかぬ、人間の日々の活動、日々の仕事のその中に能く法華經の信仰の精神を織り込んで生活をして行かなければならない。だから「仕官を法華經と思召せ」である。

それから「一切世間の治生産業」といふのは、生活を資ける所の日々の産業——産業といへば、士農工商の營業、生活をやつて居る事柄すべてをいふのである、そこに信仰の力が入つて来なければならぬこの「仕官を法華經と思召せ」といふ意味を十分に日蓮主義者は心得て、信仰と實生活の一致した所で二重生活をせぬやうにして行かなければならぬ。その代りに出来ぬ事を要求するのではない、「法華の信者は冬でも單衣を着て、飯を食はぬで居れ」といふやうな、そんな難かしい事を言ひはせぬ、ちやんと人並の生活をして行く、その仕事の中に光を顯はして行くやうにさへすれば宜いのである。五貫目の物しか提げられない者に、十貫目の物を持ってといふのではない、二三町しか歩けない者に一里も駆けるといふのではない、併しちやんとその人の出来得る程度に於ては、正直なる潔い生活をして行かなければならぬといふのである。

居ハ氣ヲ移シ、物ハ心ヲ轉ズ、象ハ廐ニ依テ變ジ、  
 虱ハ頭ニ處テ黑シ、是レ賢者ノ三ビ鄰ヲ遷ス所以  
 ナリ、大ナル哉居乎、擇バザル可シヤ

—— 神 山 要 路 ——

# 釋尊中心の本尊觀について

この一篇を故槐木顯正上人の靈前に捧ぐ

中村清一

天台大師の教が觀心を中心とするに對し日蓮聖人の宗教が信仰を本位とすることは今更いふまでもない。而して觀心の對象が不可思議境であるに對し信仰の對象は本尊である。本尊の問題が日蓮主義信仰の中心となることは、敢て異とするに足りないであらう。

本尊の實體が一應日蓮主義の事觀の對象たる事の一念三千の妙體と同一であるべきは論を俟たない所であるが、しかしこれを吾人の意識に於て統一的に把持せんとする場合に三つの觀點が存するのである。第一は宇宙觀的實相（法性・眞如）中心の見方、第

を進めることゝしよう。

この三つの觀點は何れも必要なものであり、且つ一つの立場が他の二つを互にその中に含むやうな關係になつてゐるのであるが、吾人の信仰意識の上に、その何れを最後の歸着點とし、他の二つをその中に含め又はその前提として止揚統一すべきものであるか、といふ問題を考究せねばならない。何となれば、この三つの立場を單に併立させて置くことは分析的探究の上には宜しいことであるが、明確なる信仰意識を打立てる上にはそれは餘りに多面的な不統一なものとなり、却つて純乎たる信念の内容とするに適當しないことになるからである。事實日蓮聖人も種種の御書中にこれら各種の立場を述べて居られるのであるが、しかし大體に於て同一の個所では異なつた立場を混用せらるゝことなく、却つて或る場合には一つの立場に立つて他の立場を排斥するやうに見えるほど純粹にその立場を主張せられることもある

二は人身觀的己心中心の見方、第三は佛陀觀的釋尊中心の見方である。この三つの立場は相矛盾するものではなく、寧ろ相扶け相補ひつゝ一つのものをあらはしてゐるものであるから、何れも缺くべからざる説明といふべきである。日蓮聖人の本尊觀の實體的説明にこの三方面が存することは論なく、又この他に教法觀や行法觀の方面から見ると種々の觀點のあることも否定出来ない。それ故に教・行・人・理・果の五法の凡ての方面が本尊の問題と直接に結び付くのであるが、今は實體的研究の上から、先づしばらく後の三者（人理果）だけについて考察

ので、從つて時としては聖人の本尊觀の中に矛盾があるか、やうにすら見られ、かくてその間に會通の問題を生ずることゝもなるのである。吾々は日蓮聖人の一代の御文章を大體通覽することを得るのであるから、この種々の見地を理解した上で、最後の信仰意識を打立てる上には、その中の最も勝れたる、而も聖人の中心的主張に最もよく合致したる見地を採用することを忘れてはならない。

第一の實相中心の立場に於ては、十界衆生の一々のものに局限せられざる全體、即ち全宇宙を取つてそれを直ちに本體的考察の對象とするものである。然るにこの立場に二種類がある。即ち一つは理中心のものであり、他の一つは事中心のものである。理とは現象の根源にある絕對者としての眞如をいふのであつて、この眞如の中に現實（事）の一切萬法が生起するものとして理の中に事を見る一元統一的見地である。その二は事中心のものであつて、實在

を單に超越的なる理として見ることなく、寧ろこれを現實的な事として見るものである。——この中に又二つある。即ちこの事をやはり全體的のものと見全宇宙を一個の活動的生命と見るのと、これを個體として見、個體の中に理もあり又全體の十法界の事が存在すると考へるのと、である。前者は宇宙そのものを直ちに一人格として見るのであつて、これは佛教の諸法無我の大原則に照し聊か獨斷的の議を免れない。之に對し後者は個そのまゝを普通となし個の常住と互具とを教へるが故に「事常住事互具」と名けられるのであるが、この立場はこの第一の實相中心の見方でも成立せぬことはないが、寧ろ第二の己心中心の立場に移して考へる方が一層親しいやうである。即ち後者（己心中心）の立場ならば、己心の遍滿を認め他心も亦同じく遍滿するものとして個の互具を考へればよいのであるが、前者（實相中心）の場合には自然、實相が多元的となり謂ふ所の中心

が確立しないことになるからである。——それ故に實相中心の見方は事中心にも考へられるが、何れがこの立場にふさはしいかといへば寧ろ理中心の（眞如縁起流の）考へ方の方がこの立場にふさはしいといふべきである。故に天台大師は一面にこの實相中心の立場を論じつゝも（理本事述）而も觀心の實際的修行を立つる上にはこれによらずして、寧ろ己心の中心とする一念三千の觀法によられた次第であらう。

第二の己心中心の立場とは絶對を單に抽象的に若しくは直接に全體に即して見ることなく、實相といひ眞如といひ結局個々の人格的存在の内面にある本質に他ならぬと見るのである。この立場にも二つある。一つはこの己心をなほ理的に即ち自我に即する全體我、普遍我（理的なるもの）として見るのであつて、この見方は單に前の實相中心の見方を己心の立場に翻譯したものに過ぎないと考へられる。己心

中心の立場にふさはしきものは寧ろ現實の事の己心を中心とするものであるが、この場合にもこの己心に内具せられる全體としての十法界を理的に見ると事的に見るとの二つの見方があるわけである。前者は單に潜在的に吾等の心に十界を具しその一々が縁に隨つて發現する——尤も佛界が實現する際には全部の相が一時に顯現することも考へられるのであるが——ことによつてそれが始めて現實的のものとなることを見る見方であり、後者は現實に存在する客觀的十法界そのものが直ちに己心に内具するといふ見方である。（しかし實際に於て後者の立場は前者の立場を同時に包含するものである。觀心本尊鈔の最初のとこに潜在の意義に説かれた觀心の説明は、次で述べられる事具の觀心に直ちに攝せられること、明白である。）

しかしこの己心中心の見方といふものは、やゝもすれば不鮮明な覺を以て満足し、又若しこれを明瞭

に考へんとすれば、兎角獨我論や個我否定（個と全體とを直接に同一視せんとすれば個の獨立性を見失ふか全體の客觀性を見失ふかの何れかであらう）の如き不合理な思想に陥るか、さもなければ單に事に理を具する潜在的互具の立場に止まり易い。又假令己心の中に現實の客觀的十法界を具すると考へても、たゞそう考へるだけではそこに宗教的信念に導く明瞭なる歸結が未だ捕へられてゐない。勿論、宗教に於ける種々の神秘的體驗乃至事實をこの原理によつて説明することが出来るから、この感激を己心觀の方に移してこの觀を信仰的に充實せしむることも出来るのであるが、それはこの觀から直接に獲られるものといふよりは、寧ろ却つて實際的修行の體驗的効果が單に之によつて合理的に説明せられるものと見るべきであり、結局この觀の效果如何は専ら體驗の深さに依ることとなるのである。従つて天台大師を始め宗教的に非常に深い體驗を有つて居られ

る方々は別として、一般の人達はこれによつて最後の宗教的安心を得ることは困難であらう。故にこの立場は像法時代の修行として結局日蓮聖人の採用し給はざる所であつた。

殊にこの己心中の見方を悪用すれば、釋尊其他聖者を輕んじ單に自己を直接に佛の如くに思惟せんとする野狐禪の増上慢に陥り易い。これは信仰上道義上害あつて益なきものである。總じてこの己心中の立場は實相觀上大切なる一階段ではあるが、強いて之より信仰上の歸結を導かんとすれば、却つて野狐禪や迷信の如き不健全なるものに陥り易く、精良い方でも萬有神教以下の不純なる信仰を免れぬやうである。眞に道を求むるものは須らく之を通過して更に高尙なる立場に進み至らねばならぬ。

第二の立場は佛中心の見方である。佛中心といつても吾等にとつて單に佛界の全體をとることは殆んど意味をなさぬところであるから、どうしても個體

の佛をとり、その中でも特に吾等に縁深き教主釋尊を中心とすることが當然である。釋尊は壽量品の金言によれば、三世十方一切の諸佛の活動を一身に攝するところの、無始無終三身即一の本佛にてましますが故に、釋尊一佛をとれば餘佛は盡くこの釋尊の絕對的中心に統攝せらるゝこととなる。加之釋尊は十法界に遍する絕對の色心（法身）を有し給ふ上に、その智は十界の全體を攝り實相の普遍をそのままに體驗の上に具現し給ふ。故に釋尊の本佛たる意味合そのもの、中に實相觀は現實に活躍してゐるのである。しかしこの場合、實相觀そのものが前の場合比して著しき進歩を示してゐることを忘れてはならぬ。即ちそれは、單に法身の常住のみならず報應二身の實在をも示すが故に、理（個佛釋尊なるが故に實は事である）の遍滿の上に智の遍滿あり、智の遍滿の上に更に慈の遍滿あり、而してこの慈悲活動の遍滿によつて更に功德の遍滿あり、法界は本佛

の事智悲力用功德の大活現場としてそこに佛界縁起圓慈の宇宙觀が成立し、實相が直ちに溫き人格的恩寵を意味するものとなる。又この轉回と共に己心觀上にあらはれたる佛性の遍滿は正因佛性より緣了二佛性の實在——「本有の三因」——となり、そこに智識と信仰と完全に一致したる信智一體の妙行が成立する。而してこの妙行の對象となるものが即ち本門の本尊であつて、本佛釋尊は、一方に於て客觀的實在者として吾人の救濟者となり信仰の對象となると同時に、他方に於て己心内具の事の佛として事觀の究極を成立せしめる。開目鈔の

發迹顯本せざれば眞の一念三千も顯れず  
九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に具はりて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし  
の文、觀心本尊鈔の

我等が己心の釋尊は五百塵點乃至所顯の三身に於て無始の古佛なり

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり佛既に過去にも滅せず未來にも生せず所化以て同體なり此れ即ち己心の三千具足三種の世間なり

の文等は即ちこの本佛中心の觀心である。殊に觀心本尊鈔の「問曰教主釋尊自之堅」以下の本門の觀心が特に、過去より實在し活動し給ふ現實の釋尊を中心として問答せられてゐる點は最も注意すべき處である。——而して本佛を中心として信仰の立場に立つとき、そこに本門三寶式の本尊觀が成立する。三寶式も種々の一體三寶が可能であるが、佛中心の三寶がその根本であり正統である。法（三寶式に於ては教法の意義を中心とすべきである）と僧とは佛が衆生を救ひ給ふ現實的活動の中に成立することは云ふまでもない。

この佛中心の立場に立つときどうしても事觀の立場を採るより爲方がない。佛とは現實の釋尊であり、

而も果上の本佛にてましますから、これを單に理として見ることは出来ない。而して本佛は吾人に對し客觀的に實在し給ふものであるから、佛と吾人の互具を論ずるとき、どうしても個體と個體との互具を論ずる事具の思想になつて來るのである。實相中心が——實相そのものを直ちに唯一の實在と見るが故に——理に事具する意味の理具の思想に陥り易きこと、己心中心が——單に己心の現實的存在のみを偏重して——事に理を具する潜在的互具に陥るか、或は——現實の己心を直ちに全體そのものと同一視せんとして——獨我論或は個我否定論の如き不合理なる見解に陥り易きに反して、この佛中心の觀心こそは眞に事に事具するところの正真正銘の事觀であつて、これぞ日蓮教學の最高真理として開目鈔及本尊鈔の究極的に主張するところである。而もこの立場が信、智、一體の妙、妙行として、釋尊の因行果徳の二法を籠めたる妙法、五字の受持に於て始めて實

踐的に成立すること、本尊鈔の示す如くであるから日蓮主義の信行はその成立の根本基礎より觀心と完全一致するものであると共に、釋尊に對する信仰と、妙法に對する信仰とは抑も根本的に一つであることが知られる。即ち釋尊も妙法もこの立場に於て始めて現實の救済力あるものとして信仰の對象となると同時に、釋尊の感應は妙法の力を通じてあらはれ、妙法の本濟力は釋尊の慈悲大悲の意輪に基くのである。釋尊の使者としての本化上行菩薩日蓮聖人の大恩も亦之と完全に一致するものである。更に原理的に考ふるに於ては、佛と衆生との關係に於て單に機械的互具互融の論に止まらず、生ける精神的、渴仰、救済の關係に至るのも亦、この佛陀中心の立場である。學者の中には前者の機械的互具の關係を以て之を直ちに精神的感應の事實と混同せんとするものがあるが、是は彼等の痼疾ともいふべき例の思想混亂に基くものである。日蓮聖人の教が重要

御書に於て何れもこの温き精神的關係を教へて居られることは明かである。何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ、何なる月日ありてか無一成佛の御經を持たずして可いであらうか……以上三つの立場を述べたことによつて、日蓮聖人の本尊觀の歸結は、實相觀己心觀の階段を経たる上の佛身觀に歸着すべきことが明かになつたことと思ふ。而して前二者の立場に於ては單に互具互融を論ずることに盡きることから一體三寶のみに止まるけれども、第三の立場に於ては一體三寶の上に更に現實的救済の方面より論ずる別相三寶論が成立し、別相三寶は信行の立場を意味するのであるが、而もその際三寶の間の關係をよく調節して、法實僧寶を尊敬する所以は佛寶を尊敬すること、一致するのみならず結局推功歸本すれば本門の本尊の中心たる教主釋尊の大恩に感謝すべきであるといふことも知られるであらう。學者或は觀心の理論的説明に於てはあくま

で實相中心又は己心中心を採るべく、信行に至つて始めて釋尊を中心とする本尊觀がよいやうに云ふものもあるが、それは未だ實相觀に於て眞の事觀に達せざるのみならず、開目鈔や本尊鈔を正しく解せざるものであると思ふ。客觀的に實在し活動し給ふ教主釋尊の三世間——(一) 本時の娑婆 即 靈山淨土(二) 壽量百劫の教主本佛釋尊、(三) 上行以下九界の所化——そのものが、己心の三千具足三種の世間なり、と論ぜられたる本尊鈔の觀心こそ日蓮主義の最高事觀であることか、よく銘記せねばならぬと思ふ。(即ち單なる十法界を内觀するのではなくして佛界緣起圓慈の法界であり、更に進んで功德化せる三千世間を内觀するものでなければならぬ。而もそれは單なる原理としてのものではなく、現實に存在する教主釋尊の有相の靈山世間を内觀するのである。而もその内觀は單なる内觀に止まらずして、信念によつて具體的に之を顯現し受得する方法を講ず



るのである。結局観心はこの信念による現實的體得を反省的に内観するものとして信念の内に攝得せられる。「功德化の三千を受持の一念に具す」といはれた先師の説明が、如何に観心本尊鈔の説明と一致するものであるかといふことを知るべきである。若し夫れ久遠實成極果の佛の自證の境界たる本地難思の境智の妙法に至つては述佛等の思慮すらも及ばず、況んや吾等末代の凡夫は、釋尊之を四句の要法に結び、因行果徳の二法を具足して譲り與へ給ふを信念受持し奉る他に、之を受得する方法は全くなきものと知らねばならぬ。

以上を要約すれば、實相中心は理觀に陥り易く、己心中心は佛の客觀的實在を忘れ易き弊あるに反して、佛中心の本尊觀は事具の正觀に適するのみならず、更に吾人の觀念觀法の境地を超えたる本佛自證の妙法をも釋尊の教法たる五字を通して受得することを得るといふ利益があるのである。次に教行人

理果の五法がこの本佛中心の立場に於て如何に統一せられるかといふ點を略説するならば、

第一 果法については、釋尊は佛界の全部を統攝し且つその中心たる本佛にてまします。

第二 人法については、釋尊自身に人身觀の一切の意義を具ふるのみならず、本佛の實在によりて己心觀上にも本有の三因、即ち無作の三身が成立する。而も釋尊と吾等との關係は單なる互具關係より一步進んで精神的感應の事實が成立する。

第三 理法即ち法界については、至十法界は事理共に釋尊の一身に具はつて餘なし、これ即ち事具によるものであつて、釋尊中心が伏匿なる見地であるやうに思ふのは事具を知らざる人である。

しかしこの事具の見地は尙超越的機械の見地であつて、その上に個性對立の上に立つ精神的關係が成立することを忘れてはならぬ。この本佛を中心とせる現實的なる宇宙觀こそは正しく日蓮主義

法界觀の歸結たる十界事常（個性實在論）、佛界緣起（本佛の現實的活動を中心としたる法界の一元統論）並に圓慈の（法界の一切を本佛の慈悲遍滿の上に成立せるものと説く）宇宙觀に他ならぬのである。

第四 教法については、彼の聲字實相論より來る曼陀羅思想や阿字觀的、眞言陀羅尼的思想の如きは、釋尊の教法たる妙法のはたらきに他ならぬ。題目を唱ふことに神秘的功德あるも亦、この五字に籠められたる釋尊の神通力並に功德に基づくものである。又妙法を或は己心の本體として或は宇宙の實相として本體的に説明した思想もあるけれども、これ等は結局釋尊の本地難思の境智を出でざるものであるから、教法としての五字の中に結要して授けられてゐるのである。故にこの教法觀の全體は三寶中の法實に歸着するものと見て差支ないのである。

第五 行法については、日蓮主義の一切の善行は妙法受持の一善に統一される。（これは勿論統一であつて單一で足りるといふことではない。）これを本尊に約していへば一切の善法は歸依三寶に歸す。而して三寶の中心は釋尊であるから、精神的には十界の一切の善行は本佛に對する歸依渴仰に基づく。これ即ち單なる理に勝れたる事の精神的關係であつて、開目鈔の所謂「主師親」三徳に對する「尊敬」とは即ち是である。

かやうにして本尊に關する一切の見地を釋尊中心の立場に統一することが出来る。勿論、同様にして他の立場から統一を試みることも出来るし、又それをやつておくことも一應は必要なことなのであるが他の立場からの綜合は兎角現實の個性的對立を無視して單に同體論に歸着するが故に、眞に事と事との關係を正解するに適當でないのみならず、佛の客觀的實在とその現實的救済とを重んぜず、從つて信

摘要

行に相應しないといふ缺點があることは前來度々述べた通りである。元來このやうな點については自由な立場に立つて全般的に比較研究を試みねばならぬ。そうして日蓮聖人以後の教義の發展は非常に有益なものがあるけれども、中には兎角自派の主張を立てんがため淺薄なる智解を以て偏した主張をなすものもあるやうであるから、その様な見解よりも寧ろ先づ日蓮聖人自身の御遺文に溯つて、而も五大部等の重要御書を中心として正直に研究を進めて行くべきであると思ふ。

一、宇宙觀的實相中心の立場からいつて最も重んぜられるものは眞如である。眞如の上に萬法ありと見る理本事迹の立場は未だ抽象的なを免れない。眞に具體的な立場は反對に、現實の事相の中に眞如ありと見るものである。然らば現實の事相とは何か。それは個々の人格とその世界である。眞如はこの個體の内面にある普遍者である。これを『事體理德』といふ。事體理德の立場は實相中心に見るよりも、寧ろ己心を中心として見る方が一層よく表象される。

二、眞如の遍滿は個に攝せられて含蓋となる。その含蓋の中心を自己の一念にとる。そこに一念三千の觀法が成立する。しかるに三千が單に理法であるときは、現實的には、事物を未顯現のものとして具する潜在的互具の論に止まる。三千が現實の事相で

あるときは、客觀的に存在する全宇宙をそのまゝ己心の内面に具することとなる。これを『事直具事』といふ。己心中心の互具論はその何れにも通じて考へられる。それは、事の己心を擧げてゐても未だ事の客觀を擧げてゐないからである。

三、之に反して開目鈔の（發迹顯本の上に立つ）九界佛界双關の互具論は眞の事の互具論（まことの一念三千）である。この九界の代表として自己をとり、佛界の代表として釋尊をとる。即ち——遍滿が含蓋となり含蓋が中心となる——その中心が二つあれば、他は省略するとしても事具といふ意味合は明瞭になつて来る。佛界に九界を具するといふのは實際の活動の上に具はるといふことであつて、即ち、釋尊の十界應現として、或はその所化として、現實的に攝せられてゐるのである。國土世間も單なる果報としての世間ではなくして、佛が衆生を救ふための場所として實際に設けられたる事の淨土である。

而してこの一切（佛界緣起の三世間——雲山虚空會）を己心に具するといふことを意識すれば、そこに双關の事具の意義が極めて明瞭となる。しかるにこの佛界が壽量品の教主釋尊に於ける佛界であること、この互具が双關の事具であることを忘れるから、遂にまでも墮して行くことになる。理と事との岐れ路は實に對象としての本佛釋尊の客觀的實在を十分に意識してゐるか否かにあるのである。

四、觀心が單なる不可思議境より一步進んで客觀的に實在し給ふ本佛の三世間を對象とするに至れば、その對象は信仰の對象と一つになる。是れ即ち本門の本尊である。信智一體の妙行はこゝに始めて可能となる。而してその實踐的修行方法は唱題である。唱題の一行に觀心と信仰との双方の究極が集中する。しかし觀心だけでは吾々には到底釋尊の全功德を受得することは出来ない。本地難思境智の妙法

は信念唱題以外の方法では吾等のものとはならない。是好良樂の取服とは即ち是である。

五、能具(一念)と所具(三千)とに夫々理と事とがあつた如く、具といふ關係にも亦理と事との區別が考へられる。即ち信念に於ける實際的顯現に即する具は事の具であり、理即に於ける單なる可能的具はなほ理の具であるといふことが出来る。本門の觀心が信念に於ける實際的發現の具を反省的に内觀するものであるといふことは、觀心本尊鈔に於て明かである。

六、信仰と觀心と完全に一致したるところに本門の本尊が成立することは上記の如くであるが、觀心本尊鈔は觀心の意義をこゝまで發展せしむることによつて信仰の本尊を打立てることを目的とするものである。即ち觀心は本佛釋尊の客觀的實在性を完全に認むる意義に於ての事具となるものであつて、若し觀心によつてこの客觀性と佛の現實的個性的活

動の意義が些かでも曖昧にされる位なら、寧ろ潔く觀心を棄て、一途に信仰に向ふべきである。

七、個佛釋尊以上に本佛があり釋尊が述佛であるやうに考へるのは、個體の普遍を認めずして超個體の普遍を認めようとするもので、これは理本事述論である。個々の人格を離れて事の實在を考へることは、佛教の許さざる獨斷論である。所謂妙法蓮華經佛とはかくの如き獨斷的實在論ではあるまいか。



# 法華經講話

(第二十四講)

小林 一郎

## 妙法蓮華經方便品第二(其八)

前回までは方便品の中で、釋尊が世の中に出て教をお説きになる、その目的を説明して居られる途中までの話であります。釋尊の五十年の間の説法といふものは、實に多方面のものであつて相手に依つて、その人の機根に相當する教を説かれるのでありますから、或る時には非常に淺い事も説かれる、或る時には非常に深い事も説かれる。それを比べ合せて見ると吾々共の眼ではまるで矛盾して居るやうです。或る場合に説かれること、他の場合に説かれることとは、まるで兩立しないやうに思はれることさへあ

る。これは誰でも疑ひを起さなければならぬことですが、その問題に就いて方便品には、最も明快に、誰も疑ふ所の無いやうに説明がしてあるのであります。即ちそれは方便の教と眞實の教とがあるのです。方便の教は相手に應じて説くので如何様にも説くけれども、併しながらそのいろ／＼に説いた事は決してそれだけで終るのではない。或る低い教を説いてその教を理解すれば、それを縁として更にモット高い教を學ぶやうになつて来る。又それがわかれば更にモット高い教を學ぶやうな心持が出来るのであつて、結局は教といふものは一種しかないといふことがハッキリと言はれて居るのであります。

それは少し繰返すやうであります、要するに方便の教といふのは、教を聴く人の心持に随つて説く。相手が子供なら子供のやうなことを言つて聴かせる、相手が大人なら大人のやうなことを言つて聴かせる。相手が馬鹿なら馬鹿な者に合ふやうに、相手が利巧なら利巧な者に合ふやうに、要するに聴く人の心持に随つてそれ／＼適當な教を説く。これが方便の教です。初めから難かしいことを言つたつて、まるでわからなければ何も教へる効は無用であり、ますから、相手の程度に應じなければならぬ。併しなから相手の程度に應ずる教ばかり説いて居つたのでは、それでは佛が教を説いた効が無い譯です。何故ならば一切の人間といふものは決して完全なものではない。それは學問が有るとか無いとかいろいろ相違はあるけれども、いづれにしても完全無缺なものではない。だから相手の氣に入るやうな事だけ言つて居つたのでは本當の教にはならない。初めは

相手の近づき易いやうな教を説いて行くけれども、結局は何れの人間よりもモット高い所まで皆を引上げてやらなければ、何んにもならないのです。そこで最後には佛様御自身の意に随つて自分がこれならと思ふ事を有體に説かれる、これが結局である。それがなければ詰まらぬ話なのです。今までの方便だけで終るならば、佛が世の中に出て教を説かれた効は無用であり、ます。だから方便の教を終れば眞實の教に行く。随他意の教に依つてだん／＼大勢の人間を教へ導いて、結局随自意と言つて佛自身の心の儘に自分が信する所を少しも變へないで説く。さういふ時機が来る。その時に至つて、初めて一切の人間が教を求め、道を求めるといふことの意味が本當にわかる。斯ういふ事を言はれて居るのであります。この説明を聴きまして、初めて五十年の説法にいろいろ相違があるといふ意味が能く諒解された譯であります。

そこでモウ一つ言はなければならぬのは、その極く低い教を説く時でも、低い教を説くからと言つて、相手を決して馬鹿にしては居ないといふことです。そこが大事です。世間の通俗の書物といふものを見ると、まるで見る人を馬鹿にして書いて居る、確な事は書いてない、あれではいかぬ。極く低い事を言つても、その低い事を縁として、更にモット高い所まで相手の人が考へて来るやうに説いてやる。そこが佛様の教の非常に尊い所です。つまらない事を言つて居るやうに見えても、そこに非常に深い意味が籠つて居る。だからそのつまらないやうな教を聴いて成程と思ふ時は、モット上の方まで行きたいやうな気分になつて来る。一切の人間といふものは皆佛に成るところの本性を有つて居る、所謂佛性を具へて居るのでありますから、今眼の前に見た所では馬鹿のやうに見えても、教へ導き方さへ良ければ、どんな勝れた者にもなり得る。だから如何なる者でも

馬鹿にしてはならない。又どんな悪人だと言つてもそれを見離してしまつてはならない。今は悪人だけれども、教へ方に依つては善き者になれる。勝れた者にもなれる。斯ういふ考へでその人に接して居られる譯です。ですからどんなつまらない者でも馬鹿にはしない、どんな悪い者でも憎まない。その心持が自ら佛様の仰しやる一言一句にも表はれて居ります。その教といふものが極く低い方便の教であつても、その中に高い眞實の教に通ひ得るところの道が自ら開けて居る、そこが非常に尊い所です。譬へて言へば水の流れのやうなものです。何れの河の水も谷の水もつまりは皆大海に入るののである。それと同じ事で、佛の教のどんな低いものでも、その低い教からだん／＼深入りして行けば、だん／＼高い教に入つて結局は佛様の御心持をその儘に打明けられた教、即ち一番高い教まで到達することが出来る。それはつまりその人の心掛けに依り、その人

の機根に依る譯であります。だから人々は決して自分を悔つてはいけない。又自分が一通りわかつたからと言つて『モウこれでお終ひだ』といふやうな、そんな心持を起してはいかぬのでありまして、決して自ら輕んぜず、又自ら驕らずして、さうして一通りわかつたら更にモウ少し深い方にそれがわかつたら更に深い方に入つて行きますと、つまりは佛の境界には到達し得られる、決して途中で停つてはいかぬ。

これが精進といふことです。さういふやうに先へ先へと進んで怠らないといふことが所謂精進であつて、この心持がなければいけない。いつでも『これで澤山だ』と思つたらそれでお終ひです。精進しなければいけない。精進は難し無心持、本當に純粹な、清らかな心持を以て進み進んで行くといふ、この氣分さへありますと、佛の教は皆具はつて居るのでありますから、初めは低い教から入りましてだん

しに心に落着いて来る。落着いて来るとこれはやめられなくなる。その辛抱が大事なことでありまして私なども初めてお經を讀んだ時には、幾度かお經を抛り出したくなつた。『こんなものを讀んでも役に立ちはしない、馬鹿々々しい事が書いてある』と思つた。併しながら抛り出して見ても何だか氣が惹かれて又取上げ讀んで見る、讀んで居る間には何だか捨てられなくなつて行く。やはりこれは根氣が良くないとなか／＼自分のものにはならないのでありまして、皆様の中にもいろ／＼程度の差がござりてありませう。前からやつてお居る方にはこんな事を申上げる必要もないが、若しこの頃經典などに親んだ方がありであれば、そこらは餘程考へて御覽にならないとなか／＼初めからわかるものではないのであります。併し何處か捨て難い所がある。それを頼りにして深入りして行きますと、いつとはなしにわかつて来る。それは何故かと言へば、佛が如何

だん深入りをする事が出来る。

これは人間同士の話をすると同じことで、お經を讀んでも初めはわからぬものです。私共は東京で育つて初めて旅行をする、例へば仙臺へ行つて仙臺の人と話し合つて見るとわからない、鹿兒島へ行つて鹿兒島の人と話し合つて見るとまるでわからない。所がわからないと言つて癪癪を起してはいかぬので、そこに十日居つたり二十日居つたり、三十日居つたりする間に何だかわかつて来る。わかつて見ると、前に變だつた事があまり變でなくなる。だん／＼にわかつて行く。それでそこに二ヶ月なり三ヶ月なり居て見て、初めてそこへ来た時の事を考へて見ると『どうしてあんな事がわからなかつたか』と、自分で自分を怪むやうなことがあるそれと同じ事であります。佛の教に初めてぶつかつた者にはなんだか譯がわからぬ、併しながらそのわからぬ事を辛抱して幾度も／＼讀んだり聞いたりして居る間に、何とな

なる場合でも、吾々共を佛様御自身と同じ境界に導かうといふ、その大慈悲心を失はすして説かれて居るのでありますから、その慈悲心は其のお言葉の中に自然に表はれて居る。それでわかつてもわからぬでも何かそこに心が惹きつけられて居ります。それを頼りとして修行するならば、永い間には必ず得る所があるに違ひない、その事をこれまで讀みました所に説いてあります。更にそれに續いて。

舍利弗當に知るべし

我本誓願を立て一切の衆をして

我が如く等しくして

異なること無からしめんと欲しき

我が昔の所願の如き

今者已に満足しめ

(舍利弗當に知る 我本立誓願 欲令一切衆 如我等 無異 如我昔所願 今者已満足)

そこで『舍利弗よ』と呼びかけて言葉を更められた。『我本誓願を立て』——『本』といふのは『は

じめから」といふ意味で、お釋迦様は佛陀伽耶といふ所で修行をして、さうして本當に人生の深い意味を究められて所謂覺りをお開きになつて、それから世間へ出て教を説かれたのであります。その教を説かれる初めから斯ういふ心持であつたといふ。それが「本」といふことであります。この頃になつて斯んな事を考へたのではないぞ、自分はモウ世の中へ出て教を説き始める抑々の初めから誓願を立て、是非自分が一生涯の間にこれだけの事をしたといふ心持をチャンともつて居つた。

その時に考へた事はどういふ事かといへば「一切の衆をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す」で、すべての人間を自分と同じやうに、本當に覺りを開いたものにしてやりたい。斯ういふ考へをきめたといふのです。これは短い言葉でありますけれども、非常に廣大な思想が含まれて居ります。一切の衆といふから、有らゆる人間といふこと

この事は決して私(わたくし)が自分で佛教を信じて居るから、佛教に片量員をして申す譯でも何でもないのであります。世の中で私の知つて居る範圍の宗教に於て、佛教以外に斯ういふ洪大な事を言つて居る例は無い。耶蘇が神の子として世の中に出て衆を教へ導いたけれども、聖書の何處を見ても、人間が神と同じになるといふことは言つてない。私が二三年前に短い間であつたけれども歐羅巴を歩いて見て、英吉利へ行つたり、獨逸へ行つたり、佛蘭西へ行つたりして、向ふの人間を相手に此方は怪しい外國語だけれども、中には通譯をする者もあつたりして、どうやら話を通じたと思ふが、いろ／＼な話をして、佛教とは斯ういふものだといふことを説明して見ると、大概わかる。たゞ如何してもわからないのは、人間が佛様に成るといふことが全くわからない。人間が佛様に成る、そんな事があるものか。人間は人間だ、何處迄行つても佛様に成るものでは

でせう。有らゆる人間と言へば、その中には馬鹿もあれば、利巧もあり、善人もあれば惡人もある。けれどもその中の利巧な人間だけを教へようとか、その中の善人だけを相手にしようといふのではない。一切の衆である。善人でも惡人でも馬鹿でも利巧でも、苟くも人間である以上は、皆佛に成れる本性、所謂佛性を具へて居る。佛と相通するところの性質を具へて居るのでありますから、その凡ての人間をだん／＼と教へ導いて行く。その教へ方には易しいのもあり、難しいのもある。十年で出来るのもあれば二十年で出来るのもある。一生懸つてもなかく／＼いかぬのもあるだらうけれども、兎にも角にも有らゆる人間をだん／＼教へ導いて、その凡ての人間が皆我が如く等しくして、佛様御自身と少しも變らぬ、佛様の通りの者になるやうにして行きたい。斯ういふ一つの願を立てた。これは實に廣大なる願であります。

ない」と斯う言ふ。それは基督教でそんな事を教へない。基督教では人間と神様とは別なものだ。人間は神様になれるものではない。いつまで行つても人間は人間だ。人間が一番えらくなつたら天國に生れて、神様のお側に侍(まじ)り得るものにはなるだらうけれども、神様には成れない。耶蘇と同じには成れない。斯う教へますから、「佛教に於ては人間が佛と同じものに成れると言ふが、そんな事はあり得ない事だ」と言つて、彼等にはどうしても解らないのであります。これはどうも眞に困つたことであります。その他の事はよくわかるのです。佛教に於て嘘を言つてはいかないと言つたとか、泥棒してはいかないと言つたとか、そんな事を言へば皆能くわかるのであります。人間が佛様に成るといふことは、どうして西洋人にわからない。わかつたやうな顔をする者もあるけれども、本當にはわからない。それは基督教に於ても、又マホメツト教に於ても、人が神と同じ

じものなるといふことは決して言つてないからであります。支那の孔子の教に於ては、人々は皆君子の道を行つて、さうして聖人にも賢人にもなれるといふことを一通り教へて居りますが、併し孔子は「論語」の中に、

上知と下愚とは移らず。

と言つて居りまして、一番上の智慧の有る者と、一番下の智慧の愚かな者とは變らない。一番上の者は本當に偉いのだ、一番下の奴は駄目なものだ。其の眞ん中に居る者が修養次第で聖人にも賢人にも成れる。一番上と一番下は仕方がないと孔子は言つて居る。「吾々共も人を相手にして見るとそんな氣がするのです。實は有體に言ふと、上知と下愚とは移らずと思ふことが考へられます。學生などを教へて見ると、「彼は逆も駄目だ」と思ふのが實際ある。話をしてもわかりはしない、わかつたつもりで居るから返事をさせて見ると、返事をすればだん／＼いけ

いた其の初めから自分の理想とし、目的として居られたといふのでありますから、實にこれは驚いたことでありませう。この事だけでも私は佛教といふものは世界に類が無いと思ふ。それが出来るか出来ないかといふことは實際の問題ですから、お互が努力して見なければわからぬ譯であります。兎に角佛の教といふものは斯の如き目的、斯の如き理想を以て説かれて居るのです。決して一部分の人間だけ救はうといふのではない。生命の有るものなら皆救つてやる、生命の有るものなら皆佛様御自身と同じにしてやる。斯ういふ心持を以て説かれて居るといふのでありますので、これこそ實に大慈悲でありませう。チョット讀んで見ると僅に五字か十字の言葉でありますから、何でもないやうでありますけれども、いろいろの事實を思ひ合せて見ますと、實にこれは廣大無邊な事を言はれたものだと思ふのであります。随つてこの佛の大慈悲を考へました時に、茲に二

なくなつてしまふ者がある。本を讀めば讀むほど馬鹿になる者も實際世の中にあるのです。だからさういふのを眼の前に見ると、本當に孔子の言ふ通り上知と下愚とは移らずで、上の者と下の奴は別のものとして、マア吾々の教へる所は眞ん中の人間ぐらゐの所だらう。普通から言へばこんな氣が起るのであります。今の世の中の有體の有様と言へば、これはモウ仕様のない筈にも棒にも掛らぬ者があるといふことは事實であります。

然るにお釋迦様はそこをモウ一段超越して、斯ういふ風に言つて居られる。「一切の衆」といふ中には馬鹿もあれば、人殺しもあれば、泥棒もあれば、恐ろしい悪い事をした者があるでせう。その人間を相手にして容易には出来ないけれども、結局「我が如く等しくして異なること無からしめん」佛様と少しも異はないやうなものにしてやる。佛の境界に到達せしめてやる。それを抑々世の中に出て教を説

つの大事なことが起ります。それは私共は先づ自分を輕んじてはならぬといふことであります。今斯うして喋つて居る自分が實は何もわかつて居はしない。わかつたやうな顔をして茲に立つて喋つて居りますけれども、本當の事は何も私共にはわかりはしない。一通りの説明ならば出来ませうけれども、それが自分のものになつて本當に自得するといふやうなことは、なかく今私共の力で出来る事ではない。併しながら幾らお經を讀んでもわからないと失望すると共に、ア、失望してはならない、お釋迦様は一切の人間を皆佛にしてやると仰しやつたのであるから、自分が努力さへすれば終にはわかるのだらう。決して失望してはいかぬ。決して自分を輕んじてはいかぬといふ氣が起るのであります。又モウ一つは他の人に對してもさうです。私共が少しばかり物を言つて見ても、譯がわからなかつたり、此方が親切にしてやるのを却つて恨んで反抗したりする者を見

ると、『彼奴は不埒だ』と思ふけれどもその時に又思ひ返して、イヤ是れはいけない、佛様は一切の人間を佛にしてやると仰しやつたのだから、吾々でも怒つたり、人を卑めたりしてはならない。あの馬鹿な、あの恩を知らない、人の道を辨へないやうに見える者でも、あれがキツト佛に成れるのだらう。成れなければ佛様がさういふことを仰しやる筈はない。して見ると是れはまだ自分の骨折が足らないのであらう、自分の努力に何處か缺けた所があるのだらう。モウ一奮發しよう、斯ういふ心持になる譯であります。でありますから、この『欲令一切衆、如我等無異』といふのは僅かに十字でありますけれども、此の十の文字を本當に心に刻んで居るならば、私共は如何なる場合にも失望することは無い。又どんなに骨が折れても、骨折り効が無いと言つてガツカリすることも無い譯であります。實にこれは人生を本當に明るくする、何より尊い言葉だと言は

る。昔からいろ／＼考へて來た事を今までに段々に説いて、その説いたことの結論を今茲でお前達に話すのだと、斯ういふことでありまして、『満足しぬ』といふことは、自分の考へて居たことを、遺憾なく打明けて説く時機が來たのだから、これから自分の打明ける事をお前達がよく聽いて、修行して呉れさへすれば皆佛に成れる、だから昔から自分の望んだことは、今自分の話す事をお前達が實行することに依つて満足されるのだ。斯ういふことです。満足するといふのは、お釋迦様が説いたからそれで満足するといふ譯ではない。今まで言はうと思ふ事をスツカリ言つてしまつたからそれでおしまひだといふ、そんな簡単なことではない。自分が打明けて説くことをお前達が實行して、その心を持ち續けて行けば、お前達の中から佛と同じものが出來るからそれで自分も満足することになる。斯ういふ意味であります。此の言葉の中には、今此處に集まつた汝等が實

なければならぬと思ひます。併しながらまだ今の私共の智慧ではわかりませぬ。あの人殺しをしたり、泥棒したり、種々の悪い事をして居るやうな者が皆佛様と同じに成れるといふことは、チョツト私共には見込みが附かない。けれどもそれは自分の智慧が足らないから見込みが附かないのでありませう。佛様が斯ういふやうに仰しやつて居るのでありますから、これを一つの目標として、私共は自分の修行を勵むと共に、又他の人も同じ道に導いてやるといふ心持を有たなければならぬ譯であります。

さうして『我が昔の所願の如き今者已に満足しぬ』とあります。自分は昔から人間を皆佛にしてやらうと思つて居つたが、この願望が今茲で満足したとある。今満足したといふのは、今茲で自分がスツカリ打明けて、自分の生涯の説法の精神を明したから、この事が凡ての人にわかりさへすれば宜いのであ

行しなければならぬぞといふ、その意味が充分含まれて居るのであります。それを忘れてはいかない。人の批評をするやうですけれども、その所をい加減にして置いて、『佛様は満足だと仰しやつたから、なんでも構はない法華經を讀んでさへ居れば佛になるのだ』といふやうなことを言ふ人がありますけれどもそれはあまり淺はかである。此經をたゞ口先で何遍讀んでも、それで佛に成れるものではない。讀んだ事と行ふ事とが一致するやうでなければ、決して佛の境界に行くものではないといふことは、之から後に説かれる、いろ／＼な事に依つてわかる譯であります。ですから吾々は如何ほどでも高い所に自分の理想を置かなければならぬけれども、その理想を實現する爲め、骨が折れる。ウツカリして居つては到底出來ないぞと自分を戒めて、何處までも自分を鞭撻して行くといふ心持を忘れてはならない。



一切衆生を化して 皆佛道に入らしむ

(化一切衆生一 皆令入佛道)

一切衆生といふから、善人も悪人も、馬鹿も利巧も、凡ての人間をだん／＼と教へて、結局は佛様と成るべき道を実行させるといふのですが、此の佛道といふのは無論自利と利他とを兼ねたものです。これはモウどんな場合に説かれるのでも、佛様に成るといふ時には、必ず自利と利他を兼ねて居る。自分を善くするといふ事と、人を善くするといふ事とを必ず兼ねる。自分一人善くなれば宜いとは少しも言つてない。それから又自分を捨て、他の人だけ善くすれば宜いといふことも決して言つてない。自分が覺つて、さうして他の人を覺らせる。自分が悦びを感じて、さうして他の人にも悦びを與へる。いつでも自利と利他を兼ねて居る、それが佛の道であります。これは偏つてはならない。「人はどうでも自分さへよければ……」といふのは、無論悪い事です。併し

自分といふものを無視するのではない。自分を捨てるといふことは一通りの意味でありまして、本當は自分を捨てるといふことが、結局自分を完うすることになるのであります。親が自分で物を食べないで子供に食べさせましても、決して親は不足に思つて居はしない。子供が物を食べて喜んで居れば親自身も嬉しい。そこに行けば自分を捨てるといふことが却て大なる悦びであつて、結局自分の爲でもある。萬事がそこに行かなければ本當ではない。だから宗教上から見れば、結局は自分を捨て、は何もない。たゞその自分といふものに就て、五尺の身や五十年の命の小さい自分だけを考へるから自己といふものがつまらないものになるのだけれども、本當の自己といふものは、人の悦びを自分の悦びとするといふ、そこに本當の自己があるのであります、いつでも自己といふものは雙方完うされる。それが本當の佛教であります。

「自分はどうでも人さへ宜ければ……」といふのはこれは善いやうに聞えるが、そこを考へなければならぬ。「自分はどうでも人さへ宜ければ」といふのは、決して永続的な者はない。つまり人の爲に骨折ることが自分の悦びでなければならぬ。それでなければ本當でない。「自分は苦しいのだけれども人の爲だ……」といふ、それでは決して永続するものではない。それは一日や二日や十日は宜いでせうけれども、永く続けば、「自分は苦しいけれども人の爲に……」といふのでは我慢が出来なくなつてしまふ。結局人の爲にすることが、それが自分の悦びだといふ所まで行かなければいけない。だから自分を無視することではない。そこは人を教へる場合に、よく考へて置かないといけない。

外から見ると、あの人は苦しからうと思はれても、その人自身は其の苦しみに見えることを悦びとして居るのだから本當の事が出来るのであります。結局佛の道はいつもそれです。「一切衆生を化して皆佛道に入らしむ」自分が佛に近い心になると共に、他の人をも皆佛と同じやうな心持になるやうに導いて行く。そこにいつも大なる悦びを感じる。又自分の骨折に依つて一切の人に悦びを與へ、一切の人に満足を與へるやうに努める。是れが佛道に入るといふことで、さういふ風にすべての人間を皆導いて行くといふのです。

若し我衆生に遇へば 盡く教ゆるに佛道を以てす

無智の者は錯亂し 迷惑して教を受けず

我知んぬ此の衆生は 未だ曾て善本を修せず

(若我遇衆生一 盡教以佛道一 無智者錯亂 迷惑不受教 我知此衆生 未嘗修善本)

だから佛はどんな者に遇つても皆佛に成る道を教へる。佛に成る道といふのは、自分も眞の満足を得て、又自分の努力に依つて他の人にも悦びを與へ、

力を與へるやうにする道を教へるのである。ところが是れはなかく難かしいことなので、なかく佛の教へられる意味を正しく諒解する者は容易に無い。愚かな者は心が亂れて居て正しい分別がつかないから、佛の言葉の意味がわからない。取り違へたり思ひ違へたり、折角教を與へようとしても教を受けない。さういふやうな全く愚かな、佛の教を受けないやうな人間を能く觀察して見ると、これは無理はない。未だ曾て善の本を修して居ないからである。「善の本」といふのは何か、これは無論心の立て方が本です。心の根本がシツカリして居なければ、行ひの上に見れた一つ一つの事を善くしようと努めても、實際の世の中には書物などで習つた通りの事が其の儘現はれて来ないから駄目です。例へば實際の問題に於て斯ういふ事がある。私共は自分の子供や若い人にいろ／＼の事を教へて居る。そこで先づ斯ういふ事を教へる。お前はこれから世の中に立つ

ていろ／＼な事をして行くのだから、今から人に親切を盡すことを心懸けなければいけない。人を突き選けて自分勝手をするやうではいけない。自分の事は後廻しにして、人の爲に便利を圖り、人の爲に幸福を圖つてやれと斯う教へる。是れは一通り筋が立つて居るから能くわかる。それから又別な時には、お前はまで學生であるから、先づ學校の時間などはよく守らなければいけない。今の内から不規則では仕様がなれど教へる。これも一通り能くわかる。ところが私は新宿の奥の方に居りますが、私の子供が山の手線の電車に乗つて學校へ行かうと思つて来て見ると、朝の七時か八時頃で電車は満員で乗れない。親父が言ふには、人を突き退けて自分が先へ出てはいけないといふのだから、あなたお乗りなさい／＼とやつて居ると、いつまで経つても乗れない。その内に時間は疾に過ぎてしまふ。然るに親父は學校の時間を違へるなど言ふ。さうすると「どうも親父の

言ふことは出鱈目だ、親切にしようと思へば時間を守れない、時間を守らうとすれば親切が出来ない」斯ういふことになる。そこで子供は「親父は出来なない事を二つ教へる。これは絶対信用が出来ない」と思つてしまふ。世の中にはこれに似たことが多い。先輩や何かにいろ／＼な良い教訓が與へられるけれども、その教訓が兩立しない。此方を立てればあつちが立たない、あつちを立てれば此方が立たないとなつて来る。それで人間は初めから墮落するものではないけれども、いろ／＼教を受けて兩立しない事が幾つもの起つて来ると、「こんな馬鹿々々しい、實行の出来ないやうな教とか道とかいふやうなものは全く迂遠なものだ。こんな事をやつたつて世の中に役に立ちはしない」といふので、サラリと一切を捨て、しまふ、そこで墮落する。

それだから唯だ百千萬の善を教へてもいかぬ。善の本を教へなければならぬ、善の本とは心の持ち方

です。一々の事はその場合によつて適當に判断したら宜い。物には輕重があるから、或る時には人に譲るが宜いでせう。又或る時には人を突き退けても宜いでせう。人を突き退けるのは悪い事であるけれども、その突き退けることに依つてモット善い事が出来るなら——例へば人の危急の場合にかけつけて助けてやるといふやうな事が出来るなら、それも已むを得ないかも知れぬ。しかしそれほどでない時には人に「お先へ」と言つた方が宜い。それはその場合場合で違ひ、その時々で違ふから、それに對してそれぞれに正しき判断をするためには、平生に於て其の力を養つて行かなければならぬ。如何なる場合、如何なる事に對しても正しき判断を失はないといふことは、平生の修養に依るものである。その平生に於て心の根本を造ることを教へないでたゞ一つ／＼の事柄だけを教へるからいけない。「親切にしろ」「時間を守れ」といふやうな目録だけ書いて教へる

からいけない。その目録を書いたものには兩立しないことがある。併しながら心の根本がシツカリ出来て居れば、その場合々々に正しい判断が出来るから、いつも宜しきに應じて行ふことが出来て、少しも困りはしない。でありますから前にも申したことがあつたやうに、悪人といふものは結局馬鹿なのです。分別が足らないから悪い事をする。分別が本當に明かになつて、善い道がチャントわかつて居れば、悪い事をしつても出来るものではない。その善の本といふものを造らなければいけない。本當に自分の私を捨て、正しき分別をするやうに、平生から修養を積み、平生から修練を重ねて行くといふことが大事である。それが何か事のある時に現れる。平生にその心の根本を養はずに置いて、その一つ一つの事柄だけを如何ほど澤山教へても、學校で習つたやうなことがそのまゝ實際に出来るのではない。そこでどうも佛様の教を聞いてもわからぬ者が多

いといふのは其の咎である。その人々は未だ曾て善の本を修めない、即ち心の根本を養ふといふことを少しもしない。自分で深く考へて見て、心の土臺から建直しをするといふことをやらずに居る人々だから、斯ういふ連中はなか／＼わからない咎だといふのです。

### 堅く五欲に著して 癡愛の故に惱みを生ず

(取著三於五欲 - 癡愛放生レ惱)

五欲といふのは五體の欲、眼に見、耳に聴き、鼻に嗅ぎ、口に味ひ、身に觸れるところの、色とか、形とか、匂ひとかいふものに依つて生ずる欲。それに執著して居つて、さうして癡愛の故に惱みを生ずる。「癡愛」といふのはその愛に囚はれることです、淺薄な愛です。愛は悪くはないが、愛に囚はれるのが悪い。癡といふことは己れを中心とする意味であつて、己れを中心とする愛は本當の愛ではない、己れを捨てる愛でなければ本當の愛ではない。所が吾

吾は凡夫ですから、愛すると言つても己れを中心とする愛である。花が美しいと言へば、その花を折つて歸つて自分の家の床の間の瓶に挿さなければ承知しない。皆自分を中心とする愛である。人に對してもさうです。吾々は友達を愛することも知つて居る、子供を愛することも知つて居る、家内を愛することも知つて居る、勿論父母を愛することも知つて居る。けれどもその愛する場合に於て、果して己れを捨て得るかどうかと言へば、これは難しいでせう。ウツカリすれば、愛する／＼と思ひながら自分の或る満足をするの中に織込んで居る。それが癡愛であります。私共は時々さういふことを感ずる。自分の子供などを何處か連れて行つてやつたりする。さういふ時に果して子供に満足を與へるつもりで連れて行つてやるか。後で自分を振返つて見ると、親父が自分の好きな所に子供を無理に連れて行くやうな氣味がある。洋服一つ買つてやつても、子供の好きなものよ

りは、親父が自分の好きなものを買つてやる。子供が不足を言ふと、「ナニニこれが宜いのだ、お前はこれがわからぬか」といふやうなことを言ふ。どうも愛することは愛するけれども、自分を中心とする思想がそこに織込まれる。だからその愛といふものは變な愛になる。自分では愛するつもりで居るのだが、後になつて振返つて見ると、自分の満足といふことがそこに織込まれて混つて居る。

それが酷くなつて來れば、獨占欲といふものが出て來る。自分が愛するものは自分が獨占したいといふことになつて來る。さうなれば全くひどいものです。例へば親しい友達といふものがあつて、いろいろな事を打明けて呉れると實に愉快である。「あの男はこれ程俺を信じて呉れるか」と思つて愉快である。所がその友達が他の者にもその話をしたといふことを聞くと不愉快である。「なんだ他の者にも話して居るのか、それなら俺一人親友ぢやない」……

そんな氣がする。友達でも何でも自分で獨占したい。實にこれはつまらないことであるが、凡夫にはこれが多い。

お恥かしい事でありませんが、私共には斯ういふことが多い。私は先年外國へ行き掛けに亞弗利加へ寄りまして、ピラミッドを見ました。ピラミッドの下に行きました時がチヨウド満月の夜で、實によい景色でありました。ピラミッドの下で満月を観るナンといふことは、やたら得られない機会だと思つて愉快で堪らなかつた、思はず夜半の一時頃までそこら歩きしました。それから佛蘭西の巴里へ著いた時に、巴里で會つた日本人にその話をして、「ピラミッドの下で満月を観たのは僕だけぢやないか」と言つたら「イヤ僕も観た」と言ふ者がある。私はガツカリしてしまひました。ナーニ誰が見たつてかまはない、自分が見て愉快なら宜い譯だけれども、自分一人かと思つたら他にも見た者があつたかと思ふとガツカ

印度に昔からある思想で、これは決して佛教に始まつたものではない。地面の下を深く行つて見ると、そこに地獄があると、或は餓鬼の世界があると、畜生の世界があるとかが言ひますが、併し大乘の佛教に於ては心の外に地獄、餓鬼、畜生は無いといふことを教へるのであつて、自分の心が例へば瞋恚の念に充たされれば、そこに地獄が出現する。自分の心が貪りの念のみになれば、そこに餓鬼道が出現するといふやうに言ふ。だからその心の有ちやう一つです。人を愛すると言つても、淺ましい心持で愛するのであると、愛するといふ心に伴つて又憎むといふ心持もある。所謂愛憎と言つて、好きとか嫌ひとかいふ心持があるから、それによつて欲を生ずる。その欲の爲に地獄、餓鬼、畜生のやうな世界に墮ちる。墮ちるといふのは自分の身が墮ちるのではない、自分の心の中にさういふ世界が實現されて来る。さうして六趣の中を輪回する。六趣は前に申した

リしてしまつた。全くどうも凡夫です。自分一人でありたい、他の者が同じであつては氣持が悪い。これが所謂癡愛です。好きだ、嫌ひだと言つた所で小さい自分を中心にして居る。さういふ心持で一切世の中の人に對するから、そこで惱みを生ずるのであつて、碌なことはありはしない。善い事、悪い事、皆面倒の因となりませう。

諸欲の因縁を以て

六趣の中に輪回して

三惡道に墜墮し 備に諸の苦毒を受く (以て諸欲因縁、墜墮三惡道、輪回六趣中、備受三

癡愛の故に惱みを生じて行くものですから、自分の心にいろ／＼な欲を生ずる。欲と申しますのは名前を貪るとか、利益を貪るとかいろ／＼な欲であります。それが、そのいろ／＼な欲を有つて居ります結果として、到頭三惡道に墮ちる。三惡道は前にも申した通り地獄、餓鬼、畜生の世界に墮ちるといふことは、

やうに、地獄、餓鬼、畜生、脩羅、人、天の六つを言ふので、之を六道とも申します。これは普通の凡夫の享けるところの様々な境界であります。その境界の中を輪回する。車の輪の回るやうにぐる／＼歩いて居つて、いつ迄もその間を離れることが出来ぬ。此の輪回といふのは面白い言葉です。輪回といふのは、離れられないといふ意味であつて、又そこに留まらないといふ意味です。だからお互ひは——と言ふと皆隣を中に入れて失禮ですけれども、大概さうです。怒つた境界を離れることが出来ない。けれども怒つて地獄のやうな心持ではかりで久しく居るのでもない。久しくそこに留まりはしないで、又他へ變はる。だから車の輪が回るやうに、或時は非常に怒つて地獄のやうな心持になつたかと思ふと、又少し變つて別の心持になる。それで暫くつゞくかと思ふと、又地獄のやうな心持になつて来る。ちようど車の輪が回るやうに、一所に留まりはしな

いが、又そこを離れもしない。或る時は怒つたり、或る時は怨んだり、或る時は喜んだり、さういふ世界をぐる／＼廻つて居る。そこで私はつく／＼思ふのであります。人生の苦はそれであらう。若し私共が思ひ切つて地獄のやうな心持になり切つて「人はどうでも自分さへ宜ければ……」といふ、それだけで居れば案外樂かも知れない。ところがさうは行かない。と言つてそれなら人の爲に始終やつて居れば、それも宜いだらうけれども、さうも行かないので、いろ／＼な所を廻つて行くのですから、常に善くなつたり、悪くなつたりして居る。そこが人生の苦しい所です。實際輪廻といふことは面白い言葉です。金などは殊にさうだと思ひます。金が始終あつたら是れほど宜いことはないけれども、生れた時からまるで無かつたらそんなに苦勞も無いだらうと思ふ。金といふ奴は有つたり無かつたりするから、それで厄介なのでせう。有つたり無かつたりするの

で困るやうに、輪廻するのが困るのです。一つ所に留つて居れば結局宜いでせうが、始終動いて居る。それで六趣の中を輪廻している／＼な苦を受けるといふのであります。

受胎の徴形  
薄徳少福の人として  
衆苦に逼迫せらる

印度でも佛教の起らない前の婆羅門教などの時から、多くはそれを教へて居つたやうであります。尤も婆羅門教の中にも随分偉い學者も居つたやうですけれども、大體は釋尊御出現前に於ける印度の宗教家といふものは、この因果を極く淺薄に説いて、お前が現在受けた身と現在生れた境遇は、皆前の世の報ひであるのだから、これをどうすることも出来ぬ。今貧乏な家に生れたのは前の世に悪い事をしたからだ。今苦しい事の多いのは前の世に罪を造つたからだ。だから仕様がな、諦めて我慢するより外はないと、斯ういふやうに教へたものです。それは印度の婆羅門ばかりではない、今普通世間でも「因果と諦めろ」と言ふ。因果といふことは大體諦めの言葉に使う。親の因果だなどと言ふ。ところが佛教ではさうは言はない。前の世の因が今の果を生ずるけれども、その果が現世に於て茲に新しい因となることを教へる。そこに佛教の一段進んだ所がある。吾

受胎といふのは人間が現世に生れた時のことで、その有つて生れた性質、これは決して完全なものではない。だからその完全でない性質を修養の力に依つて、或は信心の力に依つて、だん／＼補うて完全にして行けば宜い譯です。それで因果といふことは俗語にもあつて、吾々が現在どういふ身を持つて、どんな心持をもつて居るかといふことは、前の世の一切の業の報ひである。前に善い事をしたその結果が今善く現はれ、前に悪い事をしたその結果、今の自分が悪くなつて居るのだといふやうに言ひます。

吾は努力によつて新しい因が作れる。今の自分は不完全である。それは前の世から不完全であつた。前の世から教を聴かず道を求めなかつたから、不完全だけれども、何の幸か、今吾々と同じ土の上にお釋迦様が生れて、教を説いて置いて下さつたものだから、その教といふものに頼り絶つて行けば、過去の結果たる自分が、その結果たるに止まらずして、別なものになつて行けるのです。茲に佛教の非常に尊い所がある。そこで來世の果といふものは、今の果とは別なものになつて來る。過去の果たる今の自分は不完全なものだけれども、今茲で新しく修行して新しく因をつくるならば、この果として次の世には今よりモット善くなつて行く、斯ういふやうに教へられる。そこで六道輪廻することを離れる一つの尊い意味がある譯です。

それを此處に言つて居るのでありまして、教を聴かない者はさうは行かない。受胎の徴形、生れた時

からその性質がだん／＼増長する。さうして薄徳少福の人として衆苦に責められる。徳も少く、福も少く。「徳」は自分自身の徳、自分の心に具はつた性質の勝れたこと。福は餘所の人に與へる幸。だから福と徳となければいけない。自分も勝れた人になり、他の人をも利益してやらなければいけない。所が教を受けなければいつ迄も自分の心が迷つて居るから、薄徳少福でありまして、さうしていろ／＼な苦に責められて、自分自身が始終困つて居る。

邪見の稠林

若は有若は無等に入り

此の諸見に依止して

六十二を具足す

(入二邪見稠林

若有若無等

依止此諸見 具足六十二)

邪見といふのはよこしまな考へ方、物を正しく観ることが出来ないこと、その正しく観ることの出来ない考へが、林の樹が茂つて居るやうに、際限が無い何を観ても、間違つた考へばかりが起る。それを

邪見の稠林と言ふ。その間違つた考へを大掴みに別けて見ると、

有——常——差別  
無——無常——無差別

斯うなる。物の考へ方の間違ひは、大概は「有」の方の間違ひと、「無」の方の間違ひであります。有といふ方は、凡ての物はいつでも變らないといふ観方です。それから無といふ観方は、凡ての物はいつでも變つて行くといふ観方です。これは兩方とも四はれてはいけません。先づ凡ての物事が變らないと思ふのは實際間違ひです。世間の人は兎角變らないと思ふ方に囚はれる。變らないといふのは、つまり金があれば、いつ迄も金は自分のものだと思ふ。勢力を得れば、いつでも自分は威張つて居られると思ふ。それは常の方の観方です。それから美しい顔の人はいつでも美しく居られると思ふ。年取つてだんだん容色の衰へて行くことに氣が附かない。つまり變

り易いものを變らないと思つて居る、それが間違ひです。これが一方の間違ひです。けれども又さうかと言つて、なんでも無常で皆變ると思ふのも間違ひです。「ナニニ金があつたつて、何時無くなるかも知れないからつまらない。勢力が有つたつて、何時無くなるかも知れないからつまらない。世の中はいつ變るかわからないからつまらない……」といふことになると、これはつまり何でもその日の事だけ考へて、永遠の事などは考へるなどいふことになりま

足利の末頃に世の中に戦亂が打續いて、少しも安らかでない時代がありましたが、その時分に山城、大和あたり、所謂近畿地方で行はれた唄が随分ありました。これを少し世間が平穩になつてから、太閤秀吉の時代に時の上皇の仰せで以て蒐められた流行唄の集がある。その中に出て居る唄であります、世の中にどうも戦亂が打續いて、武士が生き別れ死に別れをするのは勿論だけれども、百姓が田地を作つて居つても、戦があれば荒らされたり、商人が店を持つて居つても戦になれば焼掃はれてしまふといふやうな世の中の有様になつて、彼等はどう思つたかといふと、極く淺薄な享樂主義になつたらしい。明日の事はわからないから今日せめて氣持よく暮した方が宜い。斯ういふやうな考へになつたらしい。その歌を私は先年見付け出したのでありませうが、

飲みやれ唄はやれさきの世は闇よ

今はななばの花ざかり

といふのです。これは非常に浮れたやうですけれども、實は至て悲しい歌です。酒を飲んで歌をうたはう。先の世は闇だ。今は花が咲いて居るから、今茲で歌はなければ明日はどうなるかわからぬといふ心持の歌です。私は先年朝鮮に行つて、朝鮮の昔の唄を蒐めた人に説明を聴きましたが、朝鮮にもさういふ歌が大分多いらしい。世の中が始終變動して、モウ明日の事がわからないといふ時には、どうしても人間は享樂主義になる。今日一日美味い物を食つて暮せばそれで宜い、今花が美しく咲いて居る。その花を見て樂まうといふので、これが誤まれる無常觀です。誤れる常住觀は所謂嘯りつき主義になり、誤れる無常觀は刹那主義になるのであつて、これは何れも實に恐しいものです。

現代の若い人が動もすれば享樂主義になるのはそのことです。實際明日がわからない。吾々の若い時には、學校を相當なる成績で卒業すれば職業がある。

行く。

そこで斯ういふ考へに依止して——それに支配されて、嘯りついて居りますから六十二の考へを起す。六十二といふのは、詳しく申さなくても宜いのであります。實は斯ういふ數字は一種の習慣がありまして、十に分けるとか、十五に分けるとかいろいろの習はしがある。ですから實を言ふと六十であつても、八十であつても宜い譯です。けれども、お經の中にありますから一通り申しますと、先づ自分(我)といふものと、外界(物)といふものと分けます。

物大我小  
物小我大  
物因我果  
物果我因

先づ物大と言つて外界が非常に大きいと考へる、これが一つの間違つた考へです。外界が非常に大きい

職業にありつけば家が持てる、女房も持てるといふことがわかつて居つた。所が今はさう行かぬ。卒業したつてどうなるかわからない。親父は勉強しろと言ふが、勉強して卒業してもどうなるかわからない。だから享樂主義になる。「將來の事はどうかかわからぬ、今美味いビール一杯も飲んで置け」……斯うなる。吾々の時代には「學生の間は儉約をして、卒業したら温泉ぐらゐ行けるだらう」と思つたものです。所がこの頃の學生は「卒業したら逆も行けないから、親父が金を出して呉れる中に温泉にも行つて置け」と言ふ。それだけ違ふが、それは併し無理はない。世相がさうナンですから……どうしても將來がわからないと享樂主義になり、その日暮しにならぬ。だから有無、どつちもいけない。變らないと思へばしがみつく。變り易いと思へば未來はかまはない、今眼の前だけ面白くやらうといふことになる。畢竟迷ひといふものはこの有無のどつちかになつて

といふことは、例へば人が讚めれば非常に嬉しい、人が惡くいへば非常に悲しい、金を持つて居れば非常に嬉しい、といふやうに外界といふものをいつも大きく考へる。これが大きな一つの間違つた考へであります。さうして外界が大きいから我は小さいと考へる。此の「物大我小」といふことが一つの間違つた考へであります。次には「物小我大」と言つて外界は小さくて、自分は大きいと思ふ。これも一つの間違つた考へです。これはチョット悟つたやうでありますけれども、決して人間といふものは一人で生きて居られないものであつて、一切の人と共に生きるものであるから、「外界はどうでも宜い、自分さへ宜ければ……」といふやうに、自分ばかりを大きく考へてしまふといふことは、やはり間違つた考へです。これが第二の間違ひです。

第三に物は因で我は果だといふ「物因我果」外界の事柄が原因で、外界の原因に依つて自分の全體が

つくられるのだと考へる。これも間違つた考へ方です。これは此の頃の論者に多い。この考へ方によれば、人が泥棒をするといふのは、泥棒をするやうな境遇だから泥棒になつたので、當人が悪いのではな

い。物が因で自分は果だと此の方ばかり考へる。これは一種の間違つた考へであつて、實際は兩方に原因があるのである。それから第四は「物果我因」外界の事は皆結果で、自分の方が原因だと考へる。これも間違つた考へ方です。自分の心持次第で外界の事はどつちにも動くといふことは或る程度までは行きますけれども、それだけで凡てを押し通すのは無理です。例へば「暑いと思へば暑い、寒いと思へば寒い」といふことは言へるけれども、いくら暑いと思つたつて、寒中に單衣一枚で居れば風邪を引いて病氣になつてしまふ。飯を一杯だけ食つてモウ腹がはつたと言ふことも、少しの間は續いでせうけれども、十日も食はずに居つて腹がペコ／＼になつたのをい

くら腹が張つたと思つてもそれは無理です。さういふ事は出来ない。これは皆偏つた考へです。この四つを「四見」と申しまして、みな中正でない偏つた考へ方であります。

ところが茲に「五蘊」と申すことがありまして、此の五つの事柄の二々に、今の四見が起ります。その五蘊とは、

色 受 想 行 識

の五つであります。「色」といふのは、吾々が外界から刺激を受けた時、眼に色を見たり、耳に物を聴いたりする、それを皆「色」と申します。今の心理学の用語で言へば所謂感覺であります。感覺が起つた時に、すぐに前の四つの間違つた考へが互ひにそ

れに伴つて起ります。それから「受」といふのはその刺激に應じて起つた感情であります。愉快、不愉快、好き、嫌ひ等の感情を皆受といひます。その感情が起つて、好き嫌ひを分けていろ／＼と選り好みをする時に、又前の四つの考へが起つて参ります。それから「想」は別に委しい説明を要しない、即ち思想であります。その感覺や感情が本になつて様々な思想が生れる。自分とか人とか、世の中といふことを彼此と考へて来る。それから「行」といふ語はよく誤解されるのでありますが、今の心理学の用語で言へば意志の作用です。行爲ではありませぬ。これを間違へてはいけません。これはたゞ心の中のことを言つて居るので、行といふのは行はんとする心持です。所謂意志作用で、斯うやらうと決定する作用、それが行です。

儒教の方でも「知行合一」といふことを申します

とです。行爲に現れたその形のことを言つて居るのではない。形の上で言へば知と行と一致出来ぬこともある。明日旅行して京都へ行かうと思つても、暴風雨で汽車が通じなければ行かれない。その時に當人の責任だといふ譯には行かない。だから行といふのはやはり意志の作用と解すべきです。自分の知識と意思の作用、自分の知る力と之を行はんとする心のはたらきが一致することを知行合一といふのであります。茲もそれと同じ事で、行とは意志のはたらきを言ふのであります。それから「識」は以上四つを纏めるはたらきで、之によつて前の四者が統一される。識といふのはいつでも統一する作用を言つて居ります。

吾々の心の作用を今の心理学などでは随分細かに分解して説いて居りますけれども、大體これでよく盡されて居る。外から刺激を受けて感覺が起る。それに應じて好き嫌ひの感情が起る。その感覺や感情



が本になつて様々な思想が出来る。その思想が本になつて斯ういふ行ひをしたい、あつていふ行ひをしたといふ意志の作用が起る。その作用が認められて、さうして茲に吾々に人格といふものが具はる。これを合せて五蘊と申します。その五つのはたらきが起る度毎に今の四見が出て来る。外界が大きいとか、自分の方が大きいとか、外界が本だとか自分の方が本だとかいふ偏つた考へが始終動いて居る。だから四見と五蘊で二十になる。その二十が三世の事柄に就て皆起る。過去の事にも、現在の事にも、未來の事にもそれが皆起きて来る。だから合せて六十になる。

それに前に申した斷常の二見といふものがいつでも加はる。「斷」は無常の考へ方で、物は始終變るのだと思ふこと。「常」といふのは凡ての物がいつでも變らないぞといふ考へ方。だから此の六十に二見を加へて六十二見といふことになります。さうい

ふ譯で六十二といふやうないろ／＼な間違つた考へが、後から後から起きて來ます。

深く虚妄の法に著して 堅く受けて捨つ可からず

我慢にして自ら矜高し 詔曲にして心不實なり

(深著虚妄法 堅受不矜捨 我慢自矜高 詔曲心不實)

さういふ風に物を片一方からばかり見る考へが多く、「虚妄」の法といふ間違つた見方に執著して、さうして「堅く受けて捨つべからず」。それを一つ確りと捉へてしまふといふと、捨つてやうといつてもなか／＼捨つてられなくなる。此の「捨つべからず」といふ語は實に面白い言葉です。これは行き懸りに囚はれることをいふので、それを捨てる事が出来ないといふのです。吾々の毎日の生活といふものを考へて見ますと、大概は行き懸りに囚はれて居る。「これはいけない」と思つても、「マア折角今日ま

でやつて居つたからモウ少しやれ」……「これは善いと思つても、「今急にやるのはおかしい」と言つてやらない。始終行き懸りに囚はれて居る變なものです。吾々なども佛敎のことも始終やつて居るやうですけれども、萬事がどうも行き懸りに囚はれて居るらしく思ふ。いつでも「堅く受けて」といふやうに、今まで習慣とした事に啗りついて、これを捨てる事が出来ない。靜かに考へて見るのに、私共が朝起きるから夜寝るまでの間に人と話し合つて居る事の中に役に立つ話がどれ程あるか、實を言へば殆んどありはしない。大概はどつちでも宜いことです。一時間話し合つても、此方も「どつちでも宜い」と思ひ、相手も「どつちでも宜い」と思つて居る。それでも止めたら宜からうとも思はない。「お著うございますナ」と言へば「お著うございますナ」と言つて居る。「モウお彼岸ですナ」と言へば「お彼岸ですナ」「そろ／＼秋になりますナ」「秋にな

りますナ」とやつて居る。全く堅く受けて捨つべからずです。

それで普通の人は「我慢にして」とある通り、自分といふものを中心に萬事を考へる。未だわからぬいのにわかつたやうに、未だ自分のものにならないのを自分のものになつたやうに考へて、自分を恐ろしく高い者のやうに驕り昂ぶつて居る。さうして詔曲にして心不實である。この詔曲といふ言葉が詔ひ曲げるとありますが、その詔ふといふことは人に詔ふだけと言ふのではなくして、寧ろ自分に詔ふ場合の方が多し。だから詔曲といふのはこじつけといふ意味に譯せば宜しい。私共は人に詔ひ、人の意を迎へることを屢々致しますけれども、考へて見ると寧ろ自分で自分に詔つて、自分で自分の意を迎へることが多い。所謂こじつけです。人が「無理はない」と言はないのに、自分で「無理はない」とさめて居る。會社を怠けて休みたいと思ふ時に、「チョット

頭が痛いといふのだがナ」と五六たび思つて居ると頭が痛くなる。そこで頭が痛いから休む。別に無理ではない、斯う自分できめてしまふ。人は教しはしないけれども、自分で自分を宥す。さういふ事をよくやるが皆こじつけです。さういふこじつけを常にやつて居るから、「心不實なり」で、眞實の心持が乏しい。自分ごいふものを中心にして、物事を考へて居りますから、いつも眞實の事を求めて居ない。

千萬億劫に於て 佛の名字を聞かず  
亦正法を聞かず 是の如き人は度し難し

（於千萬億劫一 不聞佛名字一 亦不聞正法一 如是人難度）

斯の如き生活をして居りますから、千萬億劫といふやうな非常に永い年月を経ましても、佛様の名前さへ聞くことがなくて過ぎてしまふ、これが普通のことでありませう。又正法といふ正しい教を聞か

らば、それは佛の名前を聞かないと言へる。耳には聞いても心では辨へない……それが普通は多いでせう。それは何故かといへば、正法を聞かずとハッキリ言つてある。それは佛の本當の法を聞かないのだ。世の中に佛の本當の法を聞いて居る人は極めて少い。これが佛法だと思つて、佛法を履き違へて居るなら、正法を聞いて居るのではない。世間にそれが非常に多いのです。自分は佛法を信じて居る、毎日家でも信心して居るし、月の幾日には観音様へ行く、月の幾日は不動様へ行くといふ人が、何の爲に信心して居るのかと言へば、お賽錢を上げて手を叩いて拜んで、家内の安全を祈つたり、商賣の繁昌を祈つたりして居るのが多いとすれば、それは正法でもなんでもない。それは正しい教ではない。さうすれば佛の名前も聞かないし、正法も聞かないのが多いのでせう。

「是の如き人は度し難し」さういふ人間は度し難

此の佛様の名前を聞かない、といふことはチョツトおかしいやうであります。日本人は皆佛様の名前を聞いて居る。阿彌陀様とかお釋迦様とかいふ名前ぐらゐ知らない人は無い。併し阿彌陀様とは何を意味するか、お釋迦様とは何を意味するかといふことを知らない人は、やはり名前を聞かないと同じです。から、さういふ意味から言へば大概名前を聞いて居ない。どれも似たものだと思つて居る。「觀音様とお釋迦様、阿彌陀様と何處が異ふか」と聞いた人がある。「同じだと思ふか」と言つたら、「大概似たやうな顔をして居るぢやないか」と言つた。成程顔は似て居りますから、普通はさういふ風に思ふでせう。「自分の家は淨土宗だから……」「日蓮宗だから……」「禪宗だから……」と言つて居るが、なにが日蓮宗だか禪宗だかチツトモわかりはしない。阿彌陀様も佛なら、お釋迦様も佛だと言ふが、佛とは何の事やらわからない。斯ういふやうにして居るな

いであるが、此處はチョツト難しいのです。是の如き人は此の儘では度し難いといふことで、さういふ人間は全く救へないといふことではない。それに無縁の慈悲といふことがある。佛様の慈悲は無縁の慈悲だと言ひます。無縁の慈悲といふことは、有らゆる人間を救ふといふことです。吾々は縁の有る者に對しては多少親切を掛けるけれども、縁の無い者に對しては多少親切を掛けることは難しい。自分の子供を愛することは知つて居るが、隣りの子供を愛することは難しい。自分の友達には親切を盡すけれども、知らない人に親切は盡さない。私はいつでも話して笑ふことですが、汽車や電車に乗つて、自分の知つた人に出會ふと、「此處に掛けられますヨ」と言つて、掛けられない所に無理に掛けさせて居る。大層親切なやうだけれども、其の時隣りの人を肘でつゝいて酷い目にあはして居る。萬事さういふ事が多い。吾吾はさうも縁の有る者には多少善い事をするけれど

も縁の無い者には善い事をしない。所が佛様は一切衆生をお救ひになります。それは無縁の慈悲である。縁の有る者も無い者も有らゆる者を皆救はれる。決して救はれない者はない。決して佛は一人でも見離すものではない。若し見離すならば一切の衆生を自分と同じものにしてやらうといふ御言葉が出る譯がない。併し斯の如き者はその儘では救はれない。然らばどうするか。

是の故に舍利弗

我爲に方便を設けて

諸の盡苦の道を説き

之に示すに涅槃を以てす

(是故舍利弗 我爲設方便 説諸盡苦道 示之以涅槃)

どうも仕様がな。初めから本當の事は言へないから、爲に方便を設けて、相手の人間の力に應じて、相手の人に了解出来るやうなことを以て、だん／＼と教へて行つて、さうして諸の盡苦の道を説く。「苦を盡す道」これは佛教で言ふ所の小乗の教でありま

す。たゞ世間に囚れない心持を持たせる。名譽も假のものである、利益も假のものである、地位だの勢力だのと言つたところが永く續くものではないといふことを能く説きまして、苦を離れる道を説く。さうして「之に示すに涅槃を以てする」涅槃といふのは要するに世間の迷ひやなにかを離れることを言ふのであります。

我涅槃を説くと雖も

是れ亦眞の滅に非ず

(我雖説涅槃 是亦非眞滅)

併し涅槃を説くけれども、それは假の事であるから、本當の滅ではない。涅槃といふことは幾度も申したやうに滅といふこと、もう一つ言へば解脱といふことでもあります。此の解脱といふことの意義を一通りお話しして置きたいと思ふ。解脱とは大體三つあります。一番初めは凡夫の境界を解脱する。これは詳しく言ふまでもない。普通の人間は金が欲しいとか、位が欲しいとか、美味い物を食べたいとか、

大きな家に住みたいとか思つて居るから、さういふ所謂物質的欲望に囚はれた状態を離れるといふことが、一應の解脱であります。これが一つの解脱です。それから第二に、世の中を超越した其の境界をまた解脱する。所謂小乗の教に依つて覺つた其の境界を解脱する。世の中が無常であつて、世の中の萬事がつまらないと思ふといふと、一切世間を離れてしまつて世間と没交渉になつて、一人で澄して居たいと思ふやうになる。それで佛の御心と一致せぬからその境界を解脱する。これが第二段の解脱であります。所謂聲聞縁覺といふやうな、小乗の教に依つて覺つたといふ境界を解脱することでありませぬ。その事は今まで幾度も申したから詳しくは申しませぬ。ところで、菩薩道を行じて所謂大乘の教を學ぶといふことになり、その大乘の教を學んだのみで充分かといへば、それではまだ足らぬ所が出来て来る。といふのは、自分は大乘の教を學んで佛様に近いもの

になれるのだと思ふと、そこに又自尊心を生じて、「斯ういふ大事な教を習つて居るのだから、小さい事などはどうでも宜い」と斯うなつて来る。そこに又いけない所が出来て来る。世間の覺つたと稱する人にそれが非常に多い。俺は法華をやつて居るから偉い、俺は華嚴をやつて居るから偉いと言つて、「ナニニ宗教といふものは人生を超越したものナンだから、そんなに日々の行ひや日々の言葉などを慎まなくても宜いのだ、心の根本さへ出来て居れば小さい事はどうでも宜い」といふやうになつて行く。さうなると、それで自分だけ覺つたつもりになつてしまつて、それよりモウ先へは行かないのでありますから、所謂増上慢といふものになる。そこを全く離れないといけない、それが第三の解脱です。だから三つの離れ方がある。凡夫の境界を離れ、それから世間を軽く見る境界を離れ、それから佛様に近くなつたといふ自負心をモウ一つ超越する。こ

の三つを超越して行くこと、心には高く大きな理想を有つて居りながら、日々の行ひの一舉一動でも軽々しくしないといふやうな、本當に確りしたものにたつて行く譯であります。その所は非常に難しい。これは禪宗などの方で「照顧脚下」と言ひまして、お前の脚下を見ろ、高いところばかり見て、佛に成ると言つても、自分の脚下が危くはないぞ、と申しますのは非常に大事な事でありませう。これは昔からよく諷められて居るやうでありますけれども、動もするとこの弊に陥り易いのであります。

「涅槃」といふことは所謂解脱であります。解脱にはいろ／＼あつて、本當の解脱といふと、今言ふやうに凡夫の境界を離れ、世の中を捨てた境界を離れ、さうして又自分は佛に近いものだと言つて自ら安んずる其の境界をも離れてしまつて、本當に自分が佛に成るまでは努力を惜むまいといふ大決心をした、それが本當の涅槃、本當の覺りです。そこま

では本當の覺りではない。だから極端に言へば、大乘と小乗の區別といふものはスツカリ離れ盡したのが大乘で、離るべきものがまだあるのは皆小乗だと言つて差支へない譯であります。法華經を讀んでも、華嚴經を讀んでも、讀むお經は大乗であつても、その人の心の持ち方はまだ小乗であることが多い。その所は餘程考へなければならぬ。吾々は凡夫であるが佛に近づき得るものなのでありますから、佛の境界に近づくまでは、決して自ら足れりとしてはならぬ。自分で自分を侮つてもいけないれば、少しばかり物が出来たからと言つて自ら足れりとしてはいけない。この事は確りと考へなければならぬ。そこ迄行くまでの間に假の覺りといふ、梯子段の一段一段のやうなものがある。それで極く凡夫の迷ひに鎖されて居る人間の爲には盡苦の道を説いて、これに示す涅槃を以てする。それは涅槃と言つても世俗の凡夫の境界を離れるだけの話なのだから、覺りと

は言ふものゝ本當の覺りではない。

諸法は本より來 常に自ら寂滅の相なり  
佛子道を行じ已りて 來世に作佛することを得ん

(諸法從本來 常自寂滅相 佛子行、道已 來世得作佛)

併し本當に考へて見ると、世の中の有らゆる物は、その根本を申すと、常にその物自身に「寂滅の相」がある。皆世の中の差別變化を離れた本性をもつて居るのである。そこは最も大事な點です。私共がお經を讀んで佛様の教を聞いて覺れると思ふけれども、覺るべき本性が自分に具はつて居なければ、どれ程教を聞いても覺れるものではない。覺れる種は自分に有る。それを専門の言葉では「佛性」といふ。佛と同じ性質である。覺れるものであるが故に佛様が教を説いて下さつた。佛は決して無理な註文をす

してしまつて別なものになれ、と言はれたのではない。吾々は本來差別を離れ、變化を離れ得る心の種を有つて居るのである。その證據には親が子を愛することを知つて居る。赤ん坊が膝へ這ひ上つて來た時に、抱き上げて乳を飲ませる母の心には、他にモウ何も考へは無い。赤ん坊が乳を飲んでニコ／＼すれば自分も嬉しい。その時には差別といふことは全く無い。元來は差別が無いといふのが人間の本性であります。たゞそれが小さい親と子とか、夫婦とか、親しい友達とかいふ間にだけ働いて居るが、元來差別を離れ、變化を離れるといふことは人間の本性です。私は生れた時は小さい子供だが、今は五十を過ぎて老年になつて居る。私の顔つきは餘程變つて行つて、私の身つきは餘程變つて居るけれども、小林は昔ながらの小林であります。變つて行く中に變らない何物かがある。私の頭に白髪が生えたかといつて別な人間だと思ふ人は無い。自分でも同じ人間だ

と思つて居る。變るのだけれども、其の中を貫いて變らないものが何かある。だから差別を離れ、變化を離れるといふことは人間の本性ナンであつて、教を聞かないでも、道を聞かないでも已に最初から有るものなのです。併しその本性が悲しいことには、たゞ小さい範圍にだけしか働いて居ない。それが大きい範圍に及ばない。それだから佛様は世の中に出て教を説いて、その差別を離れ、變化を離れた心持を一切に及ぼして、すべての人と共に同じ心持で住み、すべての者と共に同じ心持で存在するやうに教へられる。だから佛の教といふものは決して無理ではないのであります。吾々が教を聞かない間は經驗し得た事等は、たゞ狭い所にのみ局限されて居るものである。その局限された境の鎖を解き放つて大きくして行くといふ所に、佛の教といふものゝ本當の價値がある。だから「本より來」と言ふ。本より來、常に寂滅のものであつて、差別を求め區別を

立て、自他利害得失の別を立て、相争ふといふことは、吾々の本性でもなければ、人間の本性でもない。さういふものであるが故に、「佛子道を修行して、佛の弟子となつて佛の教へられた所を實行して、だん／＼とその教が自分のものになつて來れば、「來世に作佛する」といふ見込みがつく。今のこのまゝではいけないが、此より進んでやらなければ、佛と同じものに成れるぞと斯う言はれる。その現世と來世といふことの境であります。それは心の問題であつて、身の問題ではないといふことをお互ひは考へなければいけない。その來世といふものがこの身のある間に來るかも知れない。この身の亡くなつた後に來るかも知れない。それはその人の分に應じてちがふ。お釋迦様の如きは現世に於て已に來世が來て居る。凡夫であつたお釋迦様が佛様と成つた。佛様と成つた時には次の世界が開かれた。だから來世といふことを肉體の滅びた後と考へる必要はない。

今この儘で茲に別な世界、別な境界が開けるかも知れぬ、開けないかも知れない、開けなくても何も困りはしない。少しは心細いけれども、大して困りはしない。何故なら、此の肉體が無くなつても此の命は續くのですから、幾度か生れて幾度か修行して居る間に、だん／＼進んで、後に佛様に成れるでせう。結局どつちでも宜い。マア私などはモウ五十を過ぎたから、現世に生きて居る間に佛様には成れないと覺悟して居ます。と言つても決してガツカリはしない。ナーニ、この身は亡くなつても命は續くのですから、又幾度か死に更り生き更りして居る間に、いつか一度は佛の境界に近づくことでせう。だから「來世に作佛することを得ん」といふことは、今この肉體をもつて居る間であるかも知れぬ、ないかも知れぬ。それはどつちでも宜い。兎に角吾々の生命は永遠だから、だん／＼覺りが開けて、今の凡夫の境界を離れ切つた時に、終には佛と同じものに成れる。

斯ういふことであります。そこを見越して釋尊が教を説かれるのでありますから、その教の中に種々様々な變化があつて、低い教も高い教も、いろ／＼なものであるけれども、少しも驚くに足らない。銘々に自分に近い所からだんだんと修行して行けば宜い。永遠の修行であるから今すぐに覺れないからといつて少しも悲觀するには及ばないし又少しばかりわかつたからと言つて自惚れてしまふにも及ばない。それこそ本當に受持の心持を以て續けて行けば宜いといふことであります。



### 梶木顯正師遷化

『カジキシキトク』の入電を三十一日未明に受取つて三十分と経過しない間に、愛弟村田師から電話で、其の急變が報ぜられ暫時の後面談始めて其委細が知悉された。何といふ無常迅速の攝理か、痛烈なこの一大教訓は深刻に私共の胸中に強くあるものを印象された。口の説法には既に痲痺せる現代人にこり、この事實の無言の教化こそ偉大な力を持つ。法華經に『諸の能く妙法華經を受持することあらん者は、清淨の土を捨て、衆を惑むが故に此に生ずるなり、當に知るべし是の如き人は生ぜん欲する所に自在なれば、能く此の惡世に於て廣く無上の法を説くなり』で、顯正師は如來の所使として私共を愍念するが故に來至されたのであらう歟。さるにても凡情の身には……

十一月一日御通夜に、村田義本師の肝入で讀經後講演會に移り、磯部滿事、河合彰明兩氏を始め、和賀、小西等の同師で交々胸中を披瀝して追憶教化の筈を張り手向料とした。翌二日午後二時半、熊井本

光師が導師となつて密葬を行はれ、五日本葬儀が、井村前管長に依つて營まれた。交通不便な幕張の僻地であるとは云へ、師を憶ふ男女數百名、數々往復するにつれ、在りし日の師が法勞を深く感謝し、其の死を來たせしめたのは實に自分の至らぬところからであつたらうと懺悔の聲を其所所から耳にした。當日各方面から弔辭、弔電も澤山にあつた、殊に眞言宗の一住職が、師の創設された奉國會關係から始めて妙法蓮華經の題目を唱へられたといふことは、いかに師が累徳の大を思ふかに極めてよい一適例と思ふ。左に山口師の歎徳文を以て師の略歴を覗ふ便としよう。

### 歎 徳 文

夫レ國ハ法ニ依リテ昌ヘ法ハ人ニ因リテ貴シ法の弘まる事人に依ると、聖訓嚴たり 法師の任夫れ重き哉 然れども名利を意とせず正法弘通の爲に一路精進する者亦少しとなく 嗟乎 梶木顯正上人の如きは正に是稀有の好法師と言ひつ可し 然に突如として遷化せらし今日此處に本葬の儀式を營む 人天共に師を惜しむ誰か悲涙を流さざらんや

今謹んで師の經歷を案するに師は明治三十年三月十五日福井縣丹生郡朝日村に生る 父は鷺田和作母はあさを師はその長男なり

誕生の時辨の緒を袈裟懸けにせるを見て嘆じて曰く 奇なる哉此の兒佛性淺からじと されば年十一にして自ら進みて教習市本門寺法華宗本妙寺に入り髮髮染衣す されどその師匠の學問教育に意なきを不満として遂に寺を出て大阪に至る 師の叔父顯本法華の信徒たり 依て蓮成寺を訪れて梶木日種上人の膝下に歸し師弟の契約を結べり 時に十七歳なりき 是より許されて千葉縣支學林に入り大正四年卒業 一旦大阪に歸り更に師範の轉任に伴はれて上京 東洋大學に學びしが學中途にして師範の遷化に遭ひ師の名跡梶木氏を繼ぐと共に養祖母を伴ひて福井縣南居妙正寺に住職す 在任三年此の間檀家中山古兵衛氏長女こまみ女を娶り一男四女を擧げたり 更に茨城縣太田長照寺千葉縣土氣本郷町本壽寺と歴任して富山長原寺に晋山せるは昭和六年なりき

之より先大正十二年本多日生上人の命に依り東京淺草本團一の主任となり粉骨碎身統一團の發展に努力し更に知法思國會の創立せらるゝや又その主事として國民教化の運動に邁進す 此の間眞に至誠以て日生上人に奉し熱誠以て團務を執り親切に團員を導きしは衆のよく識る所なり 昭和四年七月日生上人の同師會を組織せらるゝや師をして其の同人に加へられしも亦宜なる哉

されば當長原寺住職となりても帝都弘通に忍せにすべからずとて本所練町に顯正會を設立し或は財團法人統一團講師として布教の爲には寧日無かりき 昭和八年末には千葉縣奉國會を創立し自ら會長として我國精神文化の闡揚に努め屢講演會を開いて日蓮主義の發揚に努力す 殊に大久保公會堂に於て天理教徒と公開對論

し是を一舉に粉砕して破邪顯正の實を掲げその名を近隣に響かせしは昨昭和九年十二月七日の事なりき されば老若男女を問はず青年會處女會に至る迄師の教化の徳を欣び寺禮和合し新に檀家となる者も相次いで多かりき

昭和十年一月再び知法思國會の主事として出馬し會の創設者本多日生上人の御遺志を體して會運の興隆を劃策し國民教化の法戰に魁けてその奮闘めざましかりき 約一箇月以前より風邪の氣味にて友人等醫養を勤めしも病を押して東奔西走止むことなかりき 然るに去月二十七日俄に高熱を發し病危篤に陥る急電に接して和賀義見師枕頭に在り 相語る事自若平嘗と異らず一同唱題の響の中に安祥として一期の化導を盡したる時に十月三十一日午前一時〇八分なりき

經に曰く我滅度後能爲一人說法華經乃至一句當知是人則如來使如來所遣行如來事何況於大衆中廣爲人說 當知是人以佛莊嚴而自莊嚴則爲如來所寄寄也 師受誦の句に曰く義因勇行勇因義長 師強健なる身體を爲すあるの雄志を懷きつゝ世壽三十九歳を以て遷化せられたる事情しみても猶餘りあり 然れども護法の大因縁力に賴ひては金剛不壞の妙身を成就し今や靈山會上本佛釋尊の御許に仕へ奉るならん

願くは返りて我等を導き知法思國立正安國の大願に力を副へ給へと云爾 仍歎徳文一章如件 南無妙法蓮華經

報恩閣 山口 智 光 敬白

越えて十一月十九日第三七日忌連夜に當つて、本團及び知法思國會合同主催の下に追悼會を當會館に於て午後六時から營んだ。生憎の冷雨條々としていかにもしめやかな場面を現じた。然も師を思ふもの講堂を満たし感涙自ら流れて止まぬ。小西日喜師を導師として和賀、山口、秋山等の顯本系並に日蓮宗柴田師、本妙法華の釋師、本門の柳下師等々參列壯嚴な法要が度修された。自我偈の和唱を訖つた時、知法思國會柴田理事長は恭しく左の一文を捧讀された。

追悼ノ辭

謹ミテ勸請シ奉ル本門諸量ノ大本尊來臨影懸悉地照覽アラシメ給  
維時昭和十年十一月十九日 爰ニ知法思國會並ニ財團法人統一團  
聯合主催ノ下ニ故柩木顯正上人法號顯應院日義大徳第三七日ノ連  
夜ニ當リテ恭シク追悼 式典ヲ嚴肅シ奉ル 仰ヤ願クハ増圓妙道  
位隣大覺ヲサシメ給ヘ  
ア、上人ハ近代ノ名僧知識ト顯ハレタル 故大僧正本多日生師ノ教  
化ヲ享ケ顯本教學ヲ探究スルコト久シク從ツテ同上人ノ信望甚ダ

日蓮門 法 思 國 會

下 聯 盟 知 法 思 國 會  
理 事 長 柴 田 一 能

合 掌

續いて本佛教會の追悼文及び今成權大僧正、寺尼幹事等の悼電を捧讀して自訓唱題回向中に御遺族並に一般の焼香を終つた。

七時より追悼講演會に移り、磯部常任理事より開會の挨拶あつて、統一閣時代からの縁故深い岩野直英少將の感話に續いて同師代表和賀義見師の述懐、柴田知法思國會理事長の追憶談の後、遺弟村田顯明師の謝辭あつて最後に和賀知法思國會幹事の閉會の辭で一先づ幕を垂したが、お差支ない方は再び階上の會議室で喫茶追懐の情を語り合ひ、消燈は初更の刻となつた。猶上田本團理事長は重要會議の爲めに御焼香のみで講演會には空席であり、鈴木權大僧正も先約の爲め市川へ御出講、高木鎗三郎氏は病軀の爲め、其他昵懇な十餘名から、電話やら手紙で不參を甚だ残念がられた御挨拶に接した。

因に當日御參詣の各位へは 八十の大谷權次郎翁の寄特

深キモノアリシト聞ク  
上人責任剛直荷モ邊幅ヲ飾ルコトナク所信ニ向テ邁進スル有爲ノ  
青年教家ニシテ常ニ知法思國ノ精神ニ燃ヘ身ヲ挺シテ本化正法廣  
宣流布ノ第一線ニ立チタルハ昔ク人ノ知ル處ニシテ吾人ノ殊更廣  
敷スルノ要ナカルベシト雖モ若シ夫レ既往ニ於ケル上人ノ功績ニ  
至リテハ紙面ノ能スル處ニ非ラザルモ上人ガ今春本會主事トシテ  
就任以來内外ノ諸賢往來シ身心共ニ窮極ノ窘境ニ在リテ毫モ困難  
ノ色ナク萬難ヲ排シ私ヲ去リテ公ニ就キ非常艱難ヲ背ニ負ヒ内外  
刷新ニ力ヲ測ギ本會ノ目的使命ニ之レ努メ主事トシテノ職分ヲ全  
フシ得タルハ吾人ノ深ク感謝スルトコロニシテ其ノ行跡ハ機關誌  
『教』乃至『統一』誌上ニ明カナルベシ  
誠ニ上人ハ吾ガ立正安國ノ大精神ニ基キ我不受身命但惜無上道ノ  
如來ノ金句ヲ色讀セラレ法國ノタメニ身命ヲ捨シテ躬行セラレタ  
ル上人ノ一生ハ教家トシテ洵ニ敬服ニ堪ヘザル處ナリ  
斯ノ如ク善學菩薩道ヲ積マレタル上人今ヤ乃チ亡シ 痛惜何者カ  
之ニ代ヘンヤ  
本會ハ昨冬十二月前主事齊藤一廣氏ヲ喪ヒ今マタソノ一周忌ヲ  
迎ヘザル今日現主事柁木上人ヲ失フ何タル痛恨事ゾ 寔ニ哀悼ニ  
勝ヘザル次第ナリ  
爰ニ上人ガ生前ノ行蹟ヲ讀仰シ無詞ヲ呈シテ以テ追悼ノ辭ニ代フ  
南無顯應院日義大徳 善思念思之ヲ享ケヨ  
南無妙法蓮華經  
維時昭和十年十一月十九日

を以て、明治大帝の御製護書の寫真版に相添へ、吾等聊か粗葉の御供養をさせて頂いた。又篤志の御供物は悉く御遺族に贈呈することが出来たのは悲しい中にも嬉しく爰に其厚意を乍時儀紙上に深謝致します。



# 亡き師範を憶ふ

遺弟 村田 顯明

十月二十七日夜、師範發熱臥床。

二十八日、高熱三十九度八分、腰痛、村醫中村氏來診。

二十九日、發熱腰痛殆ど去り、夕食少量攝取。

三十日、二十九日夜中ニ容態惡化、嘔吐、吐血少量、呼吸

困難、千葉ヨリ推名博士ノ來診ヲ乞フ、午後三時頃來診、

心臓ノ衰弱甚シク重態トノ診斷ヲ下サル、午後六時頃視力

衰フ、中村氏來診、危篤、インゲル注射、呼吸困難酸素吸入

十時再々推名博士ニ來診ヲ乞フ、インゲル、強心劑十五分

毎ニ注射、脈搏殆ど觸レズ、シカモ意識依然明瞭、十一時

頃ヨリ弟子親戚一同ニテ唱題、微カナル聲ニテコレニツカ

ル、十二時和實師來寺、一同ニテ讀經唱題、十二時三十分

頃ヨリ呼吸次第ニ微弱。

三十一日、午前一時八分一同唱題裡ニ安祥トシテ遷化。

我が師の遷化は我らにとつては餘りにも意外な出来事であつた。恐らく今度程私は人間の生命の頼み難さを見せられたことはなかつたであらう。十一月二日密葬式、變り果てた師の白骨を抱いて歸る夕べにも、私は尙師の遷化を事實として受納れることが

出来なかつた。病臥中の手當に就いても今にして想へば遺憾の點が尙多々あつた。殊に師の平常の頑健を信する餘り、師の病氣を輕視し過ぎ、病の早期に治療の機を逸したことは、悔ひても悔ひ切れぬ罪である。だが今それを繰返すことはよしなき繰言であるだらう。我が師——この異端と反逆の不幸なる弟子をも、尙強く深き愛に抱き導き給へる我が師は今や逝きて亡し。今はこの師の靈の前にたゞ我が過去を懺悔し、師の死が教ふる深き無言の教化に、我が將來の歩みを決行することこそ、私のなさねばならぬ最大の責務であるだらう。

師の人格については遷化以來、餘りにも多くのことが語られて來た。私は今はそれに何らの蛇足をも加へる必要はない。たゞ私はこゝでは弟子として見た師の人格の半面と、臨終に於ける師の宗教家としての姿に、その人格の片鱗を窺ふに止めやう。

師は深き信念の人、しかもその人格を特色づけるものは、自らを顧みる前に先づ他を顧みる深く暖き愛と、廣き包容の力であつた。三十一日夜、呼吸困

難、危篤の状態にありつゝ、師がその臨終の枕べに語られたことはたゞ次のやうなことだけであつた。  
「わしがこの寺に來てから五年になるが三年程以前からある研究——御遺文の研究(村田註)を始めてゐる。その研究はあと二年しなければ完成しないが、それをなし遂げずに逝くのは残念に思ふ。しかしこの仕事はもう一度生れ變つてやり遂げやう。」(三十日午後八時)人はこゝに宗教家としての、信念の人としての、我が師のまことの面目をみる事が出来るであらう。わが師にとつても残しゆく妻子の將來は決して懸念なきものではなかつたであらう。殊に暖かき愛の人として優しき夫であり、良き父であつた師に於て。しかも師は平常に於ける教化を先とし、家庭を第二とする宗教家の生活態度を終始貫徹し、それに就いては遂に一言も語ることなく、たゞ教化の半途にして逝くことのみ悲しんで世を去られたのである。わが師の死、それはまことの宗教家の死ではなかつたであらうか。

愛の人としての師を今顧みることには私にとつてはたゞ涙である。恐らく私ばかりこの師に對して不孝

に、しかも私ばかりこの師より深く愛された弟子はなかつたであらう。それを憶ふことは私には堪へ難い一つの苦痛である。私が師に仕へるやうになつてから今に六年。しかも私が師に對して思想的に従順であつたのはたゞ一年だけであつた。懷疑と動搖が間もなく私の信仰を蝕み、そして思想に關心をもつこの國の青年達のなべてがそうであつたやうに、マルクス・イデオロギイが私の心をもとらへ始めた。私は舊き傳統の一切を懷疑し、そして或時は最もラデイカルにそれを否定し、輕蔑した。このことに對しては私は一つの辯解を持つかも知れぬ。即ちこのことが一つの大きな歴史的轉回點に置かれたこの國の若き世代に共通な苦惱の一つの表現であるといつたやうな——。だがこの愛深き師と若き反逆の弟子と——その關係の如何に悲劇的であることか。師と弟子と、そこには二つの世代を隔てる溝があつた、弟子はその師に逆いた、しかも師はそのタルフトを超えて異端の弟子を愛した。それはまことに深き悲劇の愛であつたのであらう。思想的に己れに逆ける反逆の弟子を愛するといふこのことは——。



三十日夜十一時、危篤の師の枕邊に今はたゞ佛祖の加護のみを求めつゝ、私は祈つた。私は次第に冷えゆく師の手をこり、幾度も強く握りしめた。師の手も亦幾度となくそれを強く握りかへした。師は私に何も語らず、私も亦師に何ごとも語らなかつた。がすべては了解された。師の私に語られんとすること、私の師に言はんとすることも——。それはこの最後の時に於て、たゞ師と弟子とのみ知る言葉ならぬ言葉であつた。一時八分、呼べども返らぬ師の變りし姿に私は如何に慟哭したことであらう。恐らく私にとつては如何なる肉親を失ふ悲しみも、この優しき師を失ふ悲しみには及ばぬであらう。

憶へば我が師の如何に優しくいつくしみ深かりしことか。師の下に來つてより六年、師はこの我儘な私をも遂に叱り給ふことすらなかつた。私が勉強中は私のなすべき用事をも自らなし、用事の爲めに勉強を中絶せしめるやうなことは嘗つてなし給ひしことなき師であつた。家計の不如意の中を私は幾度師に無理な参考書費をねだつたことであらう。しかもその都度師は私の求むるがまゝに與へつゝ、「お前

に言はれる迄もなく、もつと不自由なく小遣ひもやりたいたのだが、思ふやうにならぬ」といはれた。何といふ優しい師であらう。この異端と不孝の弟子をか程に迄深くいつくしみ給ふとは——。臨終の最後に到る迄虚弱な弟子の身を案じ給つた我が師——。その深きいつくしみに對して、私は異端者として、叛逆の弟子として遂に師の心を安んずることなくして終つた。それは詫びても詫びても遂に還へらぬ罪であり悔ひである。だが今は師の死によつて私は甦るであらう。師の死はまことに愛の死であつた。師の愛はその弟子を甦らせた。師を葬るの日、それは舊き私を葬るの日、そして新しき私の生れ出づる日である。師の愛はすべてに打克つた！

師範の密葬式は十一月二日執行、會葬者約二百餘本葬式は五日、會葬者約四百、故師範の人格に相應しく盛大なものでありました。茲に紙上を通じて各位に厚く御禮申し上げます。

寄附金維持及團費誌料領收

(自十月二十一日  
至十一月二十日)

一金貳圓貳拾錢也	愛知縣 藤平 惣助殿	一金貳圓貳拾錢也	福島 中村 みな殿
一金貳圓貳拾錢也	兵庫縣 魚角 量吉殿	一金 壹圓 也	福井縣 若本 初造殿
一金貳圓貳拾錢也	福井縣 平池 岩吉殿	一金貳圓五拾錢也	北海道 齊藤 靜明殿
一金 參圓 也	東京 菊地 雄三殿	一金 貳圓 也	東京 濱中治三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同 伊藤 なほ殿	一金 貳圓 也	同 沼部彌太郎殿
一金四拾錢也	千葉 神山 清殿	一金拾圓 也	同 井上道太郎殿
一金貳圓五拾錢也	福島縣 渡部 トミ殿	一金五圓 也	同 森山 太郎殿
一金四拾貳錢也	鹿兒島 高田 貞彌殿	一金六圓 也	同 西山喜太郎殿
一金五圓 也	東京 山田 英二殿	一金壹圓 也	同 齋藤 ヨイ殿
一金貳圓四拾錢也	同 鈴木うた子殿	一金四圓四拾 也	千葉縣 片岡 盛助殿
一金貳圓貳拾錢也	同 今成 日晉殿	右難有領收入帳仕候也	
一金五圓 也	同 淺井 要麟殿		
一金貳圓五拾錢也	横濱 川島 清稔殿		

財團法人統一團會計

念 告

「財施も法施も更に優劣あるべからず」と釋尊は布施を獎勵遊ばしてゐます。願くは私共の教化運動御清授の御厚慮を以て誌料は何卒前金にお願申上ます。

猶團費と誌料と御混同なきやう、正團員は年額金貳圓五拾錢、贊助團員は金五圓等々ですから宜敷お願申上ます。

財團統一團會計

# 法華經の心髓

本多日生上人  
菊半截四百頁美本  
定價金壹圓五拾錢  
郵送料 金八錢

久しく絶版となつて、各方面からの御要求を満たすことが出来ませんでした。今回特志者に依り改版して皆様の前に出ることになりました。講述極めて平易ですから初心の方にも大に歓迎されつゝあります。今更内容の照會もありません。から、此機會に是非御清覽をお薦め申上ります。

發行所 東京市四谷區内藤町一番地  
電話 四谷七七七五番  
振替口座東京 六二二二番  
晋文館

取次所 東京市小石川區音羽町六ノ十七  
電話 牛込五三三三六番 財團統一團  
振替口座東京 九四二〇番 法人統一團

小林一郎先生  
法華經講話 第四輯  
菊判二百二十餘頁  
定價金五拾錢  
郵送料 金六錢

本部に於ける小林先生の御講義は法華經大講座として一部は既刊されましたが、本書は總振かな附で、代價も至廉なれば、施本用として又至極適當と存じます。

申込所 東京市小石川區音羽町六丁目  
電話 牛込五三三三六番 財團統一團  
振替口座東京 九四二〇番 法人統一團

○第一、二輯賣切 第三輯殘本少數

## 本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	金貳拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本多日生上人		全	金壹圓七拾錢
勸行作法		全	金拾錢
河合珍明著		全	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
「教」  
發行所

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
財團統一團出版部  
振替東京 九四二〇番

### 不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
編輯兼 發行所 磯部滿事  
印刷人 大辻松太郎  
東京市品川區南品川二ノ一八一  
印刷所 都印刷所  
電話 高輪六〇二四番

昭和十年十一月廿四日 印刷納本  
昭和十年十二月一日 發行  
(第四百八十九號)

注意  
▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御  
通知ノ事

發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七  
電話 牛込五三三三六番  
振替東京 九四二〇番  
財團法人統一團